

謹賀新年 共同社

狂言人語

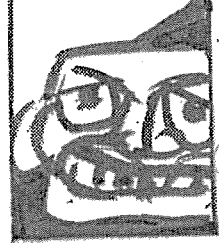
あけましておめで
とうございます。
本紙「狂言」もま
た一つ年をとりまし
た。

ベトナムの動きも、
大学の紛争も一方で
はその解決を目指し
て地味な努力が一步
々々続けられ、また
月を目ざしたアポロ
八号も無事地球に帰
りました。

激動の年、一九六
八年から新しい飛躍
の年一九六九年へ、
さあ私達も新しい歩
を踏み出しましょう
どうか本年もよろし
くお願い致します。

扱、とり年の新年
号に当って三宅藤九
郎先生より、本号あ
てに新作小舞謡「西」
をおよせいただきました
ので紹介させていただきます
いたゞきます。けっ
こうけっこうと明け
た年、皆様にもけっ

狂言



昭和41年1月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町6/2
井上重兵衛方 電(321)1480
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(481)7445

こうなお年でありますよう。

新作小舞謡

酉

鶏の鶏の▽かちどきつくる
木綿づけの▽一夜明くれば
東天紅▽けつこう〜〜と。

めでたき年をとりの春
昭和四十四年四年
三宅藤九郎 作

一月の催能

一月 七日 学生能と狂言の会
能 竹生島 山口 進一 高安 滋郎
能 舟弁慶 柳原 正文 大浜 一郎
能 末広 村田 光生 大矢木 芳明
能 花折 川島 清美 宮脇 久美子
能 森近角五 大久博 柴子
能 土井 陽子

狂言解説

醉薑||商いのため都に上り合せた酔
売と薑売(はじかみ||しょう)がのこと
(商人司を争って系図争いから、互に
商売物の秀句を云い合います。(秀句
とは言語遊戯で酔売はすの語を、薑売
は辛いからからの語を折り込みます)
争いから互に意気投合し、相売りの後
兩人笑って留めとなります。この系図
争いには他に「膏藥鍊」また秀句を
扱ったものには「秀句傘」「今参」竹
生嶋詣」などがあります。本曲は留め
が笑いとなるため目出度いものとなっ
ております。

三人長者||めでたく年貢を納め長者
号を押し下り合せた三人の長者、せ
なき長者、蒲生の長者、市森長者、は

狂言花野

野村 広二

酒盛りの後めでたく三人相舞をして、
各々の国に帰って行きます。一般に百
姓狂言は「佐渡狐」などは例外的で、
類型的、祝言性を主にしたものが多く
なっております。

鶏舞||目出たく舞入りをする舞、所
が舞入りの作法を知りません。そこで
知人に作法を教えてもらったのですが
悪戯者は当世風の舞入りととんでも
ない作法を教えます。さあ、喜びいさ
んだ舞は舞の方へ行き……………。舞の
作法にたまげた舞も、舞の恥は舞の恥
と一語になつて、舞入りをしすまし
ます。舞狂言の笑いは大体同様の筋立
で世間知らずの舞入りが笑の対象とな
れますが、異色のものには「猿舞」な
どもあります。

新年おめでとうございます。今年も
狂言や能の世界が、広い分野に多彩で
ありますよう、まづ、みなさまととも
に祈りたいとおもいます。

四十三年の年も、記録に残すことが
実に多いようです。長老たちの叙職、
芸術祭受賞、物故者、メキシコオリ
ピック芸術展示をはじめて政府派遣の
文化使節能楽行、野村狂言団の海外公
演、クロードルの新様式能、そして老
女物の上演など。どの一つ一つをとり
あげても、大きな紙幅を与えなくては
ならないでしょう。まだこのほかには
能愛好者の英文学者、福原麟太郎氏が
文化功労者になられたこと。同氏の全
集がたまたま出版中ですが、やがてで
る随筆集(4)に能・狂言の文章ものゝこ
とでしよう。明治百年記念の催しがい

ろいろ各地でありましたし、名古屋から上京し、狂言や能とゆかりの深い平曲の公演が盛會、大きな反響を呼んだのも、その後わたくしも親子二代のつきあいである井野川幸次検校とお会いした折、ともに喜びあいました。名古屋にとつて大きな話題といえましよう。声明（法華懺法）の公開も、みられた方はうらやましい限りです。これも、十二月、西村弘敬氏におあひしたとき申し上げ、弘敬氏から懺法についての話をきかせていただいてまことに興がつきなかつた。杉浦友雪氏の「関寺小町」のワキを高安滋郎氏が勤めたことも特筆したい。くわしくは、「観世」十二月号（沼州雨氏執筆）に載っています。そうそう、メキシコオリンピックには、NHK派遣のF氏に、保育社のカラーボックス「能」（丸岡大二・吉越立雄共著）を持って行ってもらいました。何かお役に立てばといつたのですが、果せるかな、第一世の老人の方が切にと望まれたそうです。この本はやはりNHKのS女史が、有職婦人クラブ国際会議に出席する日本派遣団々長としてロンドン行のときも、ねんごろに托しました。これも、あちらの婦人に差し上げて喜ばれた由。小さな能の本でも、はるばる空の旅をして、外国へもらわれていったことに、何とはなしにほのぼのとした喜びを味わいました。なおカラーテレビ（NHK）で黒川能をみたのも、初老のこの身にとつて、同じ県でありながら、冬の北設楽の花まつりや春日のおん祭もたづねられないわたくしには楽しい思い出です。

さて、名古屋では四十三年も演能はなかなかにぎやかでした。「翁」は一回（山本一）みました。これは大野弘之氏が三番叟をつとめました。

故歌村彦四郎氏をしのぶ舞いぶりでした。面箱は数度出演の井上義次君。狂言共同社は四十二年につづいて、その健在さを十分にみせてくれました。大野弘之、井上義次両君が職分に名をつらねたことも特筆したい。朝日狂言会は第十回を迎え、ますます狂言愛好者の層の広がりを目ざして、同好の士に呼びかける努力を惜しまぬ姿に、狂言の道に徹して進む真面目をみ出すことができず。世評に打ち負かされぬ強さをもつて、二十回、三十回と回を重ねて、若い世代へ、狂言芸を伝承させていく場をせひつくっておいただきたいものです。

第九回の公演をおつた名古屋和泉会も、やるまい会も盛會であつたのはうれしい。五十番に余る狂言のうち、前年同様、十五・六番ほどしかみていませんが、そのなかには、「枕物狂」「棒縛」（藤九郎）「花子」「千切木」「奈須之与市語」（保之）「佐渡狐」（千五郎）「瓜盗人」（忠一郎）「文荷」（万作）「小傘」（万之丞）など東西の狂言師の舞台に加えて、二回上演の「靱猿」（礼之助・豊弘ほか）と「朝比奈」の語り（松次郎）「長刀応答」（河村丘造・卯三郎ほか）「六人僧」（秀雄）「貫舞」（又三郎）の上演は印象に残ります。上京中の井上祐一君に、柔かい線が諸動作にあらわれてきたのも見逃してはならない一事です。また来名の人たちのなかでは茂山正義君の今年の上達も見事といえましよう。能は恥しいほどみていません。三十番はよい能はあつたでしょう。そのうち、「当麻」（鎮之丞）「邯鄲」（六郎）「殺生石」（雅俊）「道成寺」（文蔵、博太郎、小田鍋洋一）「卒都婆小町」（喜之）「高砂」（元昭）「定家」（七正）と観世能ばかりみている

ようでした。名古屋勢では、「三輪」（殿島修二）「葵上」（梅田邦久）「七騎落」（河村鉦二）「橋弁慶」（内藤泰三）「田村」（伊藤鉄之進）などがあつます。そして、能では西村欽也氏の進境いちじるしいものがあることだけ紹介しておきたい。大衆能と市民能（新能）。学生能。この年も能楽の普及、若い人たちの能・狂言研究は盛んだつたことはいうまでもありません。狂言や能の花野もあの多彩だつた春・秋をへて、冬がくればしばらく枯野も冷い風が行きわたらぬしづかな日は、一見に価いしよ。そしてまた数多くの紅白の花咲く花野にもどることでしょう。

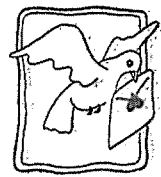
昨年、十一月京都へ「伯母捨」（金剛流・今井幾三郎）をみにまいりました。老いの（心とカタチの）美しさに打たれると同時に、金剛流には、老女物のなかに、まことに消しても消えない匂いのあることをかんじ取りました。いぶした、地味な、堅い、古拙ななかにすんだものを味わうとはまた別な優美さです。それでいて冷いものです。卒塔婆小町、鸚鵡小町のときもそうでした。さてその翌日は妙心寺の力強く整い、しづかな寺の内を心ゆくばかり歩きました。山がきれいにみえる、あたたかい日でした。十二月も京都へ。河原町で用事をすまし、誓願寺の横、新京極を横切つて、六角堂に向う。途中願を求め、日曜日もしづかな通りをおなじ歩調ですすむ。六角堂の鳩に餌をやるのが京都に来た楽しみです。そして「満仲」（金剛流）「野宮」（豊嶋弥左門）をみてかえる。これと、年末、名古屋の東部へでかけたあと、植物園に立寄る。ポインセチアの紅が目鮮やか。その花のある温室で一老女が絵を描く。老女の柔らかない美し

い心が紅いきれいな小さい絵となつてみずみずしさをかんじさせずにはおかなかつた。京都のあのしづけさ、カタチ、強さとこの老婦人のもつ柔らかなさは、狂言や能の表現にぜひなくてはならないものと、旅愁あらたなものがありました。

放送では、「ここに継ぐもの」狂言芸（野村万蔵・悟郎、カラーテレビ）「関寺小町」（梅若六郎、ラジオ）ドラマ「写楽」（佐藤慶ほか、カラーテレビ、NHK）など。最近の本では、「祇園祭」（西口克巳、弘文堂、一六二頁、世阿弥の教え）「声明——法律懺法」（朝日ジャーナル一・二一、朝日一・二一、六、間宮芳生）「褒章受賞」（平曲・井野川検校、朝日・中日など十一月中旬）それに「一枚の絵」坂本繁次郎の能面（谷川徹三、週間朝日、七・一二号）を添えた。なお、オモテの貴重な写真資料を内藤泰三氏から恵与されたこともしるしておきたい。岐阜県久瀬村の小津と日坂の能面取材、数十葉をいただいた。舞楽、伎楽面と能面の微妙なつながりをテーマに能面研究のまことに貴重な資料といえよう。因みに、同氏は「宝生」に能面研究ノートを発表されていることを書き添えたいとおもいます。

今年の名古屋能界には、人間的鍛錬と教養を第一に心がけていたかどうか、お願したい。ごくあたり前のことですが、これにもとづき、伝承によつてその芸境をなお一層きびしく、深くして、何か訴えるものをだして、深くて、しいとおもいます。未来も理想も広い視野もそのなかにこそ生れてくるといえます。狂言や能が多くの人にみてもらえることを年の始めに祈つて止みません。

能と狂言とり尽くし



昔は年号を書くのに干支(えと)を用ふる事が普通で、古い書物などには例へば「享保辛丑六月」などいふ風に書かれて居たが、明治時代になってから欧米風の様式が色々用ひられる様になり、いつの頃からか此干支などは影をひそめ殆ど用ひる事も忘れられて

酉の年 西村弘敬

河内の国の人で平岡何某と云ふのが竜

居た処、近年又干支を用ふる事が流行して来て或は年賀状に、或はカレンダーに或は彫刻の置物などと、色々用ひられて来た。

此昭和四十四年は「酉」(とり)に当るが此「とり」とはど

に鳥と云ふ文字は随分良く使はれては居るが之れが何の鳥かは名前が判らぬのが多い、例へば「夕附の鳥が鳴く」(熊野)又「此鳥の鳥けだものも」(俊寛)など外にいくらでもある。又鳥類を取扱った曲には鶺鴒(うかい)鶺鴒祭(うのまつり)鶺鴒羽(うのは)鶺鴒鶺鴒小町(おうむこまち)鶺鴒(さぎ)鶺鴒亀(つるかめ)などがある。次に鶺鴒といふ文字の出でくる謡は至つて少なく卒都婆小町の中に「逢はでぞ通ふ鶺鴒の」又経政の中に「鶺鴒も心しない様だと思ふ。今は各流共に廃曲になつて居るが鶺鴒田(にわとりた)と云ふ曲がある、其曲の概要を御参考

田山へ紅葉見物に行き、竜田明神の境内に美しい鶺鴒が居るのを供の者が見付け之れを捕へて持ち帰らんとしたる処へ社人が来て其鳥捕つてはならん之れは内裏から放されたる「夕付鳥」と云い都の四方の関々へ厄除けの為に放たれ鳥との事、其外竜田明神の神秘色々聞かされて家路に帰り来たところ、供人の中の一人の女房が鶺鴒の霊がついて物狂はしくなつたので、早速信貴山の山伏阿闍梨を呼んで来て貰ひ色々祈禱して物の氣を追払つたといふ筋で少々交つた曲であるが余り面白くもなさそうに思へる。

狂言とりづくし

今年「とり」年。「とり」とい

と一般には「鶺鴒」をさすようですが、狂言には「鶺鴒」に限らねばかなり多くの「とり」が登場します。次に挙げる曲名はその「とり」が登場、或いは少々なりとも「とり」に関連する曲です。中には鳥の名がそのままと狂言の曲名になっているものもありますが、一体どんな「とり」に関連あるものか、考えて見て下さい。さあ、新年初め、頭の体操的なものもあります。

若菜 (わか菜) 雁大名(がんだいみょう) 二人大名(ふたりだいみょう) 鳴子(なるこ) 鶺鴒流(けいりゅう) 梟山伏(かぶらうやまぶし) 柿山伏(かきやまぶし) 鶺鴒(うぐいす) 禁野(きんや) 政頼(せいらい) 雁(がん) 胸突(むねつき) 千鳥(ちどり) 狐塚(きつねづか) 餌差十王(えさしじゅうおう) ところどころで「天正狂言本」には「とりせんが」鳥せんが(鳥説教)で現行「魚説法」と同類曲です。僧の説教をお聞き下さい。

仏くわんむりやうじゅうきやう(仏無量寿經)をときたまふといっぱ、ときにさきそん(釈尊)わしの高ねにて、しほ(じお)かいつぶりの方言)色の衣をめし、同いろのくわらさき(唐鷲、くわら掛絡、能装束の一種)をつぼり(つぶり、壺折り)の上よりかけす(鳥名、巢を掛ける)。しとく(とあゆみより、いすかのうにとびあがり、しもく(撞木)おつ鳥(取)、かも四十からくとうとふ(善知鳥)やすかた、つみふかきごいしやう(罪障、五位鶺鴒)のうそ雲はれがたし。口おしくあまましこ(猿子鳥)おもへども、おもしろく御口をつばめて、人をすど

賀正

ふごや

河文

電話代表 〇一三八一番

トヨダビル店

大名古屋ビル店

とてな

船津屋

電話桑名代表 〇一八八〇番

めてこのりをとき(御法を説、糊を溶く)たふ。心さしばの者、み、つくく、これちやうま(鳥馬、聴聞)してぼだひをおこし、千にう寺(泉涌寺)のてらつゞきに参、鶯同音に法花きやう(法華経)を夜たか(読うだが)此鳥(こうのとりの)あか時のやまめがらすもろともに、こくうを渡る時鳥、我と我名をよぶ子鳥、こたふる我をしらすぎや、うかりと是をおもひつゝ、ただち心のもち鳥の仏法僧をくやうすなり。又鶴はだかなる人を見て、いかにくぐいて寒かるらん。山がらこがら木をとり出し、ひたき(火焚き)あててのそな後に、あらひばりや(洗濯り)何がな、くゐなくと夕つけの(云付け)、時きじをもとめあとりなばこれで則鳴のしぎ(文珠の職)、ぼさつのがわん(雁と願)にまさるべき、鷹に鳴とくふくろふをえんさひ(悦哉雀戯)、鳩をしゆ生かると成仏道、しゆ生くと、うんおつ(云々)。此つぎは明日とき候べし(ちん)

(鈍太郎)

同好会だより

皆さん、おめでとうございます。私は昨年十月に生れました。今三ヶ月です。名前は残念ながら未だ仮称同好会とのみ申します。狂言の愛好者の方々によってつくられました。新しい年を迎えた私、きつと素適な名前を付けてもらえるでしょう。会員の方も多勢に増え、私も大きくなるでしょう。新しい期待と計画に胸ふくらませてい

るところです。昨年私はこうした歩みをして来ました。

十月二十日 第一回
「会の発足、その意義、運営について。共同社諸師と座談会」

十一月二日 第二回
「和泉会への期待。枕物狂、靱猿の見所、台本紹介」

十二月四日 第三回
「和泉会の感想。和泉流宗家保之先生と懇談会」

この活動の中で私は手さぐりではありますが、少しづつ歩き始めました。今後も一歩々々歩き続けるでしょう。狂言のある限り、それを愛する人々が居る限り、私は止まることをしないつもりです。どうか私を可愛がって下さい。あたくかく見守ってやって下さい。狂言を愛する方、狂言を知りたいと思う方、狂言を演ってみたい方、みんなんな集まりましょう。私の会がふくれ上り、狂言を愛する層がふくれ上り、その力でこのすばらしい伝統を支える一石にでもなれたら幸いです。

新年第一回は左記の通りです。
時・一月十一日(土)五時半より
所・中区上前津「大声」
「新年会」(共同社諸師参加)
会費・一、一〇〇円他。

二月の予告

- | | | | | | |
|-------|-------|-----|------|----|----|
| 二月二日 | 梅猶会 | 梅若 | 猶義 | 西村 | 欽也 |
| 二月九日 | 観世会 | 元前 | 十一時始 | 西村 | 欽也 |
| 二月十一日 | 幸友会 | 野村 | 又三郎 | 井上 | 祐一 |
| 二月十二日 | たなびき会 | 鴨子会 | 鴨子会 | | |

新年賀謹

- | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|-----|----|----|-----|
| 藤 | 長 | 中 | 竜 | 観 | 霞 | 潤 | 観 | 観 | 高 | た | 観 | 調 | 名 |
| 河村 | 加藤 | 前田 | 藤田 | 田鍋 | 田鍋 | 林甲子 | 野崎 | 久田 | 高安 | 田鍋 | 内藤 | 友友 | 田鍋 |
| 村 | 藤 | 田 | 六郎 | 惣太郎 | 惣太郎 | 甲子 | 崎 | 田 | 安 | 惣一郎 | 藤 | 友友 | 惣太郎 |
| 二 | 久 | 昌 | 兵衛 | 郎 | 郎 | 夫 | 郎 | 雄 | 郎 | 郎 | 泰 | 会 | 会 |

- | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|---|---|---|----|---|---|----|---|---|---|---------|--------|--------|
| 名古屋能楽俱樂部 | 風 | 幸 | 金 | 掬 | 曲 | 春 | 正 | 松 | 清 | 青 | 名古屋能楽支部 | 名古屋和泉会 | 狂言共 |
| 植村 | 殿 | 福 | 片 | 柴 | 増 | 山 | 加 | 佐 | 大 | 支 | 支 | 支 | (イロハ順) |
| 真太郎 | 島 | 井 | 野 | 田 | 田 | 田 | 藤 | 藤 | 塚 | 部 | 部 | 部 | |
| 二 | 修 | 啓 | 東 | 初 | 一 | 仁 | 丈 | 太 | 一 | 田 | 田 | 会 | |
| 会 | 二 | 次 | 四 | 太郎 | 雄 | 三 | 太郎 | 俊 | 二 | 鍋 | 鍋 | 会 | |

狂言



昭和44年2月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町6/2
井上重兵衛方 電話(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電話(481) 7445

狂言人語

暖冬異変と騒がれたこの冬も、二月に入り、本格的な梅便りがこの異変の冬空にしきりと気になることです。冬の暖かい陽射しはこの身にははしごぎやすく、ありがたいことには違いありません。

狂言に関する知識、話題、その他諸々の事項を「狂言玉手箱」と題し本号より皆様にお目にかゝることになりました。何卒よろしくおひきかたの程をお願い申し上げます。

「狂言」といって「おかしいもの」と考え、「笑い」を期待していらつしやる方が多いと思います。でも、その笑いには種々様々の相があると云えます。今回はその笑いの相の中で「百姓狂言」について見て見ま

狂言玉

しょう。

百姓とは云ってもその領地の代表者です。扱はれて年に一度の晴れの上京をするのです。土鳥帽子に素抱の上だけをつけ、下は旅装束を表す脚半ですが、立派な小刀を腰に付けています。狂言成立期の時代を、そこに生きた人々を充分にしのばせる姿と云えましょう。狂言が次第に崩壊し、狂言領主の直接支配の重圧が薄れて来、領主は都に上頭(うえとう)として遠い存在となり、領

りませんが、四季折々の楽しみ、その風情はやはり冬の厳しい寒さを通してこそひとしおあはれを感じさせられるもの。暖冬を苦にするゆえんです。扱、二月は二日の梅猶会、九日の観世定式能と観世流が続きます。さあ冬の陽射しを浴びながらまた能楽堂へ通いましょう。

地には次第に新しい実力者が現れて来ました。実力者は自然代表となり今では年頭の儀式化した様な上頭への年貢上納のため上ります。やがては、こうした連中が「かくれもない大名」と名乗、太郎冠者、次郎冠者を召し抱えて鳴子をひかせる、といった地侍になって行くことでしょう。上頭の御館へやってくる百姓は突におくらかです。少しも支配者に対してこびへつらう卑屈な態度は見え

手箱

ません。御前をばはからず大声で云い合ひ、大笑し、お目玉をくらいます。出された難題に見事に応え、お流れを頂いた上、万難公事まで許されて喜びの和歌をあげ、舞い下りに国元へ下って行くのです。

筋はおよそ類型的でこれといったおかしきもありません。しかし全体にただよう終始なごやかな雰囲気と祝言性これが百姓狂言の世界なのです。狂言が単なる笑劇としていわゆる「笑い」のみを追求して行つたな

「大声会」便り

昨秋発足した狂言愛好の士の集いはいよ／＼結束を固め、会名も「大声会」(たいせいかい)と決りました。どうかよろしくお願ひ申し上げます。月一回の例会を原則とし、誰でも参加出来る幅広い活動をめざすものです。その他特に「大声会狂言教室」を毎週木曜日に開室、狂言の普及、伝統の継承と発展の一助となすべく、会員一同張り切っております。

会場 北区豆園町二の五三
佐藤友彦方 電話(九一一)八七八四
参加を希望されます方は、御連絡下さい。お待ちしております。

らば、長い時代の流れの中で百姓狂言の姿は消滅するか、或いは「佐渡狐」の様に自らの姿を変え、ことごとく残りが残り得なかつたこと云えるでしょう。

狂言は決して単なる「笑劇」に留まりませんでした。快い笑いの中に人生のまこと、あはれを認め、滑稽さの中にも人間の奥底を見つめてやみません。狂言の笑いの種々の相をそのまゝその時代に生きた人々の生活を照らすものであり、その人々の心の底をえぐり出すものなのです。百姓狂言のお百姓は変わって行きます。力を蓄積して地侍となり、さらに下剋上の世にたくましく生き抜いて行つたはずで、同様にふんぞり返つていた上頭も南北朝の争乱に、応仁の乱とそれに続く戦国の世に抗し得ず歴史の彼方に埋もれたか、或いは自らの力で、自らを変貌させる事により生きのびたか、ともあれ百姓狂言はこの時代の歴史の証言として私達に語りかけてくれます。それはそのまゝ、古典の持つ一つの意味とも云えましょう。(鮎太郎)

二月の催能

- 二月二日 梅猶会(有料)
 - 能 爽 盛 梅若 猶義 西村 欽也
 - 間 佐藤 友彦
- 能 花 梅若 猶義 高安 滋郎
- 能 餅 井上松次郎 佐藤卯三郎
- 能 田 観世 元昭 西村 欽也
- 能 間 佐藤 秀雄
- 能 杜 若 観世 元正 高安 滋郎
- 能 藤 戸 観世 喜之 高安 滋郎
- 能 間 井上松次郎
- 狂 節 分 野村又三郎 井上 祐一
- 二月十一日 幸友会 囃子会(来聴歓迎)
- 二月廿三日 たなびき会 囃子会(〃)

狂言解説

餅酒上頭へ買物をもって上り合せた加賀、越前の百姓。御前での難題に無事応え、めでたく相舞をして帰って行きます。この相舞は「三段の舞」で囃子の応答がありますが、百姓狂言では他に「松樫」などに、この三段の舞を二人一つの動作で舞う替えの型もあります。

節分節分の夜、一人留守居する女の家へ蓬来の鳥から渡った鬼が入り込みました。みめよしの女に女房になれと迫る鬼、女の色良い返事に隠れ笠、隠れ蓑までまき上げられ、挙句の果ては鬼は外へと追い出されてしまします。女と鬼の取り合は他「鬼の継子」などがあります。

狂言内外

野村 広二

正月はいい天気... ガラス越しに入る明るい日差しが静かでのんびりした、いわゆる正月の気分を伝えてくれた。朝から能、狂言をみる。元旦の「翁」は宝生流。狂言は「三番叟」(三宅藤九郎)と「鶏舞」(茂山千作)をみる。二日は一調、独吟ほか。三日は狂言二番をきく(いづれもNHK)。また二日には二、三冊の本をひらいて読む。

まづ「人間孔子」(谷川徹三)。終りの「論語のひとつひとつの言葉にわれわれは永い間の地下の営みによる結晶の堅さと結晶面の美しさを今も見ることが出来ます。しかしそれをただ眺めていたのでは、宝石を見るのと同じことで云々」のあたりは声高かによみすすむ。それから「花鏡」にうつる。「上手の感を知ること」。「この重々をよくよく習いて工夫して心をもて能の高上り至るべし」の結びはこれも声を上げてよむ。それと今年の四年に因み、「西遊記―黄花園の道士」の章をめぐる。昂日星官(雄鶏の精)が三蔵法師をくるしめるサソリを平げるくだりです。いやまことにのどかな松の内でした。鉢の梅は暖いせいか中旬にはほころびはじめた。十二日、熱田さんにでかける。「老松」(観世元昭)と「すはじかみ」(卯三郎・礼之助)。

「鶏舞」(松次郎・義次ほか)。この狂言はすうりとしてさわやか、淡い味がでていて佳品といえよう。放送は「田村」(桜馬竜馬、NHKラジオ)がよかった。本では、「かくれ星」(山田日神社の古面)(白洲正子、芸術新潮一月)、「花伝書」(英訳、桜井忠一ほか四氏共訳、京都藤部出版、未見)、「役者のみた東京」(幸祥光さんの小鼓、坂東三津五郎・安藤鶴夫、東京出版新刊ニューズ・一七)、「若者と能」(名古屋学生能と狂言の会)(名古屋タイムス・一七)、「産経能紹介」(沼艸雨、サンケイ・一四)、「日本の伝統―新宮殿と川端文学」(谷川徹三、中日・三)など。

二月は梅若猶義三番能に突盛に期待する。

夕附鳥

西村 弘敬

前号に本年の干支に因んで鶏竜田の古曲の大意を記しましたが、本号にも之れに引続き鶏に関して少々ばかり物して見ます。熊野の謡の終りに近き所に「夕附の鳥が鳴く東路さして行道の」又鳥追船の謡の中に「又いつか逢坂の夕附鳥か別れの声」の句がありまして其読み方が流儀によってまちまちななつて居る。即ち「ゆふつけどり」「ゆふづけどり」「ゆうつけどり」などでありませう。

そこで此夕附鳥とは何の事かと調べて見ましたら之れは昔都にて天皇の御不例やら外にも色々悪い事が重なったので、之れ等の悪い縁を絶ち切る為「しけい」の祭りが行はれた即ち都の四辺の関々に鶏に「木綿幣(ゆうしで)を付けて放つて祀る行事である、依て「木綿」(ゆふ)をつけた鶏故「ゆうつけどり」と云ひ習はしたもので従

って此読み方も「ゆうつけどり」と云ふのが正しいのではないかと思はれる、鶏の一つの異名とも考へられるし又四方の関々とは東は逢坂山(おうさかやま)南は竜田山(たつたやま)西は穴太(あなふ)北は有乳(あらち)であった由であります。前号の鶏竜田の鶏も此朝廷より放たれたる夕附鳥であったので捕へたのを返させられたものと思はれる。

三月の予告

- 三月二日 九皇会(来聴歓迎)
 - 能巴 植村真太郎 西村 欽也
 - 井上 義次
- 能金輪 森川みどり 高安 滋郎
- 大野 弘之
- 狂磁石 佐藤 友彦 井上松次郎 佐藤 秀雄
- 三月十二日 金城学院、南山大、狂言会
- 三月廿一日 藤田追善能(有料)
 - 能清経 梅若 六郎 西村 欽也
 - 能道成寺 観世 武雄 高安 滋郎
 - 間 佐藤卯三郎 佐藤 秀雄
 - 狂泣 尼 和泉 保之 井上礼之助 井上松次郎
- 三月廿三日 曲水会素謡会(来聴歓迎)
- 三月卅日 中日五流能(有料)

中日五流能

昭和四十四年三月三十日(日) 名古屋市栄東 中日劇場

第一部 (午前十時開演) 友枝喜久夫

頼政

江崎金次郎 瀬尾 乃武 大倉長十郎 藤田六郎兵衛

一調 笠之段

豊島弥左衛門 田鍋惣太郎

梅若 景英

高井則安 山本則寿 山本則直

梅若 六郎

亀井 俊雄 柿本 豊次

梓之出端

山田仁三郎 忠度 観世元昭

金剛

西村欽也 谷口喜代三 前川 善雄

遊女之伝

高安勝久 曾和 博朗 森田 光春

祝言

観世元昭 観世清和 関根祥人

仲光

江崎金治郎 山本敬一郎 杉 市太郎

一調 放下僧

林喜右衛門 幸 祥光

春日竜神

片山博太郎 柿本豊次

鶴之段

辰巳 孝 野守 梅若泰之

茶壺

善竹忠一郎 茂山忠三郎 善竹孝夫

宝生 英雄

松本謙三 瀬尾 乃武 藤田六郎兵衛

漆膠

錦木峯男 住駒 陽介 柴田初太郎

玉之段

金春榮治郎 班女 柴田初太郎

実盛

大坪十喜雄

信高

高安滋郎 谷口喜代三 前川 善雄

波瀾之舞

高安守彦 曾和 博朗 森田 光春

一部料金 特二二〇〇円、A一八〇〇円、B一五〇〇円、C八〇〇円、名古屋市内各プレイガイド、中日新聞、東京新聞、北陸中日新聞、各事業部、各支局



昭和44年3月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町5ノ2
 井上重兵衛方 電(321)1430
 名古屋狂言共 同 社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電(481)7445

狂言人語

三月です。いよいよ春です。扱この三月に共同社の若手旗手である井上義次君がめでたく大学を卒業、就職の為上京することになりました。昨夏は兄の祐一君を東京に送り、今また弟義次君の上京と、いよいよ「名古屋も寂しくなりました。でも晴れの出

発です。

祐一君、義次君、元気でがんばって下さい。名古屋の若き狂言師としての誇りを持ち、立派に東京で活躍して下さい。同時に新幹線で二時間の距離は名古屋での活躍をも可能とするものです。名古屋の熱田の舞台にしばしば元気な姿を見せて下さい。東京に在っても二人は根っからの共同社の若手であり、名古屋狂言界を背負う大黒柱

狂言面について

能と能面とは決して切り離すことができません。それほど能面の持つ役割は重要で、仮面劇とも云われるほどです。ところで狂言になると原則としてむしろ面を使わないと云ってもよいと思えます。

面を用いる場合はごく限られてお

狂言玉

り、大別すると二十余種となりますが、その種類と用途はおよそ次の通りです。

- 一、神仏——大黒、毘沙門、恵比須
- 福の神、登髭、鼻引
- 一、鬼畜——武悪、雷、鳶
- 一、動物物——狐(伯藏主)、狸、猿、犬、賢徳、うそふき
- 一、人間——祖父、尼、比丘貞、乙

手箱

ついでいくつか拾って見ましょう。

武悪(ぶあく)——同名の狂言があります。狂言に登場する鬼類に用います。蓬来の島の鬼から地獄の主閻魔王、人間の擬装から果ては茸の鬼茸にまで使われます。今流行りの大きな垂れ目が特徴で、上歯だけを見せて真横に下唇をかみしめ、四角いあごをし

以上の他に風流に用いる千々尉、三番叟の黒式、また狂言の一群に舞狂言と呼ばれる数番があります。これらの曲専用で作られた面もありま

す。これらの面は厳しく優雅の繊細な能面に比べて、太く強い線、大胆なタッチの中に強い人間味と滑稽さを表現しています。以下、個々の面に

三月の催能

- 三月二日 九皇会(来聴歓迎)
- 能 巴 植村真太郎 西村 欽也
 - 能 金 輪 森川みどり 高安 滋郎
 - 能 磁 石 佐藤 友彦 井上松次郎 佐藤 秀雄
- 三月十二日 金城学院、南山大、狂言会

ですから。さて今月はめずらしく、藤田追善会に「泣尼」が出ます。和泉宗家の尼に松次郎の坊主、皆様の御期待に叶えてくれるはずです。中日五流能では久し振りに大蔵流山本兄弟、善竹忠一郎、茂山忠三郎氏の舞台が見られます。

た赤ら顔の鬼です。大底は人間にたまたまれ、散々な目にあわれます。「首引」や「博奕十王」などではこの武悪面が舞台にすらりと勢揃いします。

賢徳(けんとく)——普段とりますました高徳の僧が寒い冬の日一陣の冷たい木枯しに思わず首をすくめた顔だと云います。目をむき、思わずみせた人間臭、これが動物面だから皮肉と云えば云えましょう。止動方角の馬、横座の牛、蟹山伏の蟹などに使われます。

うそふき——俗にいう「ひよっこ」がこれです。ほらふきなどと同じ云い方ですが、ほうきのような顔の中にやはりひとくせあるものを感じさせます。蚊相撲の蚊の精、蛸、その他八尾の罪人などにも使われます。

- 三月廿一日 藤田追善会(有料)
- 能 清 経 梅若 六郎 西村 欽也
 - 能 道 成 寺 観世 武雄 高安 滋郎
 - 狂 泣 尼 和泉 保之 井上礼之助
- 三月廿三日 曲水会素齋会(来聴歓迎)

- 三月 卅日 中日五流能(有料)
- 第一部 (午前十時始)
- 能 頼 政 友枝喜久夫 江崎金次郎
 - 能 砧 野村又三郎 松本 謙三
 - 能 舟 弁 慶 善竹忠一郎 高安 滋郎
 - 能 末 広 高井 則安 山本 則直
- 第二部 (午后四時始)
- 能 仲 光 観世 元正 江崎金治郎
 - 能 山 熊 宝生 英雄 松本 謙三
 - 能 山 姥 全春 信高 高安 滋郎
 - 能 茶 壺 善竹忠一郎 茂山忠三郎 善竹 孝夫

狂言解説

磁石II都に上る田舎者、松本の市で出逢った知り合いに案内され泊り込んだものの、不審から宿の亭主との話を盗聞すると、何と男は人商人でした。逃げ際に鳥目二百疋をかすめとって逃げる田舎者を人商人は太刀をふりかざして追っかけます。

泣尼II法談に出かける坊主、効果を演出せんものと泣き役の尼を頼んで同道します。扱、法談が始まるとかんじんの泣き役は居眠りを始めました。さあ何とか法談の中で起そうとする坊主と遠慮なく眠りこける尼、この二人の対象が最大のみものと云えましょう。

末広 大果報の者、太郎冠者に末広を求めよう都へ上らせました。冠者は都でスッパにだまされ、古傘を求めて来ました。主の気嫌を取り直そうとスッパに教えられた囃子物を始めます。さあ次第にその囃子につりこまれて行く果報者——。おめでたい代表的な脇狂言です。

茶壺 獲物をねらうスッパ、今日は立派な茶壺の連尺の片方だけはずし、眠り込んでいる男に出合います。一計を案じ空いた連尺の片方に自分の腕を通して隣に寝そべりました。男は目ざめてびっくり、互に自分の物と云いはりまきません。目代も処置に困りましたが、そこはさるもの——。

狂言内外

野村 広二

二月も下旬になって、またうぐいすがやってきた。それが一声鳴いただけで、表の道走る車の音に驚いてか、それきりになって、なつかしさと楽しみを消してしまった。梅の方は、暖冬のせい、一月中旬にはまだ固かった熱田さんの梅の蕾が二月の下旬には、突らずの梅も文化館の前もほころびはじめていた。呉服屋の店先で、胡蝶をあしらった振袖に梅の模様の帯が添えてあるのをみかけたのも、暖かい街の散歩の一コマであった。その頃、今年も岐阜県のG町にでかける。川沿い、走るにつれて移りかわる窓外の風景のなかには、絶えず梅があらわれて、わが目を奪った。白い梅である。

G町も梅の木の多い町であった。それと、山のはるかに上に細い月のかかる夜明の空が突にすがすがしく、美しくふと山姥の連想につながった。携行しただけでも来たかいがあつた。携行した二、三冊の本に、申楽談義と「私は思う」(谷川徹三)を入れてきた。谷川先生の本は、能楽堂の夢を書きとめられる文章をあらためて読み返えす。

下旬、京都で「籠」(金剛巖)を、その足で産経能「杜若」(観世鎮之丞)をみ、沼艸雨氏にもお目にかかれると楽しみにして果せず、当日は今頃どあたりであろうなど時々遠くへ思いを馳せながら、結局は「実盛」(坂井音次郎)の放送をきいただけ。同日淡交同人会の能組をいただいたが、三月は井上祐一君の名前を、「鎌腹」に保之、右近、祐一と並んでみつけたときは、うれしかった。しっかりやり給えと、応援のことはを心の中でおくった。二月の狂言は「餅酒」(松・礼・卯)この百姓狂言の演出は、共同社の特色を示す狂言の一つということができよう。これで、共同社一同の出演をひとわたりみた。元氣な活躍ぶりは今年の期待を裏付けるに足るもの。出だしは上々。能は「実盛」(猶義)と「田村」(元昭)。

放送は、「宗論」(忠一郎・忠三郎)「鈍太郎」(千作ほか)「二人静」(巖)をきき、教養特集「日本人の鬼」(野村万作ほか)学校放送「瓜盗人」(野村万之丞、いづれもNHK)をみる。本は、「釣狐」(浅山の良さんのこと、鷲谷七子、俳句三月号)「産経能盛

会」(サンケイ、二・二四)「43年エイツ夏季大会に出席」(イエイツと能、鎮仙会鷹姫ほか、尾島庄太郎、英語青年一月号)など。
三月は泣くに期待したい。

四月の予告

四月 六日 掬水会

四月十三日 観正会 (来聴歓迎)

能 鉢 木 吉川宇良子 高安 滋郎

井上松次郎 大野 弘之

能 舟舟慶 松井省吾 西村 欽也

井上礼之助

狂 太刀奪 佐藤 友彦 佐藤卯三郎 秀雄

四月二十日 観世会 (有料)

能 盛 久 観世鉄之丞 高安 滋郎

能 熊 野 武田太加志 高安 滋郎

能 野 守 橋岡 久共 西村 欽也

能 鐘の音 佐藤卯三郎 井上礼之助

四月廿六日 猶義会 (来聴歓迎)

能 砧 井上松次郎

四月廿七日 芳韻会

能 巻 絹 稻生 芳雄 高安 滋郎

井上礼之助

狂 歌 争 大野 弘之 佐藤 友彦

四月廿九日 幸友会 囃子会

好評 安田の交通安全貸付信託

お預け額の10倍のはたらき!!

交通戦争に備えた安田信託銀行ならではのサービスです

安全・有利な貸付信託に

交通事故傷害保険をセット

安田信託銀行

名古屋支店
名古屋市中区栄3丁目
(丸栄西)
電話名古屋(251) 5171 代表

名古屋駅前支店
名古屋市中村区笹島町1丁目
(都ホテル前・錦通り)
電話名古屋(541) 1317 代表



昭和44年4月1日発行
発行所
名古屋市中区葵門前町6/2
井上重兵衛方 電(321) 1430
名古屋狂言共闘社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(481) 7445

狂言人語

もうコートがいらぬ程となりまして。暖かい陽射しと柔らかな春風とが、待ちこがれた桜便りを連んで来てくれます。野に山に春の遊びの楽しさがある。

たくましき呑ん兵衛達

狂言には酒は欠かせません。酒盛りあり、謡い、舞い、笑いが舞台にあふれます。そしてたくましき呑ん兵衛達が登場します。その中から幾人かを拾いあげ、慰みに呑ん兵衛番付を作成しました。さて皆様の判定はいかがか――

行司 福の神

狂言玉

東方 西方

横綱 太郎冠者 横綱 千鳥の主
大関 悪太郎 大関 伯母ヶ酒・甥
関脇 船渡舞・男 関脇 貫 舞
小結 石神・男 小結 因幡堂・女
前頭 花折新発意 前頭 若和布・向
まず仕切る行司は福の神、参詣人の前に現れるや、早速御酒を請求するほど。もともと神様のごとて別格呑ん兵衛、今日は行司を相勤めします。

手箱

次なる取組みは、酒癖の悪さは日本一、乱暴者の悪太郎と酒屋の伯母を鬼面で威しつゝ酒を呑む甥。どちらも態度は良くないが、悪太郎後半には改心出家したため、呑ん兵衛としては失格。伯母ヶ酒甥の不戦勝。

さてお次ぎは舅と舞。舞が舅の爲にと持参する樽酒を、それとはしらず船中で無理矢理呑み干す舅(船渡舞)。片やあまり呑ん兵衛故に妻に逃げられ、舅の方へ妻を連れ戻しに

します。自然と人の心どつなかりを心から大切にしたいものです。恒例の朝日狂言会が六月二十二日、日曜日に開催されます。御期待下さい。

四月の催能

四月六日 掬水会
四月十三日 観正会 (来聴歓迎)
能 鉢 木 吉川宇良子 高安 滋郎
井上松次郎 大野 弘之
能 舟 舟慶 松井 省吾 西村 欽也
井上礼之助

行く舞(貫舞)。最後は夫婦ともども舅を打こかして帰るため、これは貫舞の勝――

これぞ本日の好取組。東に石神の男、西に因幡堂の女。酒呑み故に妻に愛想をつかされた男と、同じく夫に離縁させられた女。

ともに智謀、策略を尽くして復縁せんとするが、結局はどちらも女に男が追い込まれる破目となり、女の勝ち――

結びは新発意同志、片や呑みたい一心から花見客を境内に招じ入れ、べろく〜に酔って大事な花を折り土産に持たせて酔いつぶれれば、一方若和布を求めに都へ上り、若女を連れて来たばかりに、本堂で盃ごとをする事になった新発意。花に酒、酒に女はどちらもつきもの――

若いくせになか〜くせ者同志、というわけでこの勝負はめでたく引き分け。

本日の取組、これにて打ち止め。チヨン〜

狂 太刀奪 佐藤 友彦 佐藤 秀雄
四月二十日 観世会 (有料)
能 盛 久 観世鉄之丞 高安 滋郎
能 熊 野 武田太加志 高安 滋郎
能 野 守 橋岡 久共 西村 欽也
能 鐘の音 佐藤 友彦
四月廿六日 猶風会 (来聴歓迎)
能 砧 杉田 合子 高安 滋郎
井上松次郎
四月廿七日 芳韻会
能 巻 絹 稻生 芳雄 高安 滋郎
井上礼之助
狂 歌 争 大野 弘之 佐藤 友彦
四月廿九日 幸友会 囃子会

狂言解説

太刀奪 太刀を持ったぬ主従。外出の途中、見事な太刀を持つ通行人に出会いました。よせばよいのに太郎冠者、太刀を奪いに行き逆小刀まで取られてしまいます。取り返さんものと主従は帰りを待ち伏せ、まんまと取りおさえたのです……

鐘の音 息子の成人の祝いに黄金作りの太刀を与えんと、太郎冠者に鎌倉へ行き「かねの値」を聞いて来るように云いつけました。さあ喜び勇んで鎌倉へ出掛けた冠者は寺巡り、「鐘の音」を聞いて来ました。

歌争 連れ立って野遊びに出掛けた二人。しゃくやくの花を見ては、つくしをつんではとんちんかんな古歌を引用し、終にはお決まりの相撲になってしまいます。

狂言内外

野村 広二

四月のはじめ、暖かいある日の午後窓越しに眺めたさくらの高い梢には蕾がふくらんで、そのあたりいかにも春らしいのどかさを匂わせていた。

四日には、伊勢の金春奉納能、京都の東本願寺親鸞誕生八百年記念能に招かれての楽しみが、いろいろのことやを思い出させた。いたたく弁当に花びらのちりかかる伊勢、お寺のみみじの緑と、文之助茶屋の甘酒の淡味の京都。三月末の中日五流能は、船弁慶(金剛巖)をみ、楽屋で金剛夫人におあいして、京の花のたよりと東本願寺能のうわさをしただけ。また笛方藤田流先代追善は清経(六郎、笛・藤田六郎兵エ)と道成寺(観世武雄、小・田鍋惣一郎、なお笛・藤田昭彦)の二番に泣尼(保之・松・礼)。清経の六郎の出は、三ノ松すぎたところでゆっくりしてから舞台に進んだ。遠い遠いところからやつて来て、その遠方で一度止まり、ついに思い切つて妻の夢の中心に入つていくといつた感じがした。これはかつて故橋岡久太郎氏が一ノ松あたりで思い止まり、位をとつて舞台に向つた仕方が、妻のをばまで来ていながら、近寄れず、さりとてこらえ切れなくなつて、近くへよつていくようだったと覚えてるが、それと対照的で大変おもしろかつた。六郎氏のはモダンで、ダリの描く絵をみているようなところもあつた。泣尼は松次郎の活躍が目立つ。それより先、椿の展示会、

(名古屋園芸)で二〇に余る花のなかに、四海波、都鳥、八ッ橋、楊貴妃、通小町などの名前をみつけた。大蔵弥太郎氏から岐阜の土筆会二十周年記念狂言会のお知らせをうけたのもその頃であつた。

放送は、「声明と現代邦楽」(隅田川(近藤乾三、ラジオ)「山姥」(金春信高、テレビ、いづれもNHK)。本は「軍記一平家と太平記」(山下宏明、佳篇、解釈と鑑賞・南北朝の文学三月号)「文学一世阿弥の九位ほか」(石田吉貞、淡交、伝説を支えるもの(6)、三月号)「田楽」(関山和夫、朝日、なごや芸能風土記、三月上旬)など。

「大声会」四月例会のお報せ

- 一、日時四月十七日(木) 后七時始
- 一、「新しい狂言の探求」講演と座談 講師 野村広二氏
- 一、会場及び連絡先 名古屋市北区豆園町二の五三 佐藤友彦方 (電) 九一一一八七八四

五月の予告

- 五月 四日 名匠鑑賞能 (有料) 正后始
- 能 景 清 大西 信久 森 茂好
- 能 千 手 観世 喜之 高安 滋郎
- 能 小 鍛 治 大西 信彦 森 茂好
- 間 井上松次郎
- 狂 入 間 川 佐藤卯三郎 佐藤 秀雄 井上礼之助

五月五日 異 会 (来聴歓迎)

- 能 橋 弁 慶 足立 学
- 間 佐藤卯三郎
- 能 胡 蝶 植村 本子
- 間 井上礼之助
- 能 隅 田 川 浜村 園子
- 能 乱 戸田 和子
- 狂 舟 ふ な 大野 弘之 井上松次郎
- 狂 清 水 佐藤 友彦 佐藤 秀雄
- 五月十一日 片山博通追善能 (有料)
- 能 郡 耶 片山博太郎 西村 欽也
- 間 佐藤 秀雄
- 能 隅 田 川 片山慶次郎 高安 滋郎
- 能 融 梅田 邦久 谷田宗二朗
- 間 佐藤 友彦
- 狂 宗 論 井上松次郎 佐藤卯三郎 井上礼之助
- 五月十七日 一謡会 (来聴歓迎)
- 能 鞍 馬 天 狗 近藤 重次 西村 欽也
- 間 大野 弘之 佐藤 友彦
- 五月十八日 霞 会 雑子会
- 五月廿五日 正案会別会 (来聴歓迎)
- 能 竹 生 島 岡部 幸平 高安 滋郎
- 間 山 森 幸男
- 間 井上礼之助
- 能 狸 々 加藤丈太郎 西村 欽也
- 狂 昆 布 壳 野村又三郎 井上松次郎



酒 味 噌 商
た ま り

食 料 品
む と う 食 品 店

名 古 屋 市 昭 和 区 川 名 本 町 1 の 1 0
電 話 (75) 6 2 6 4 番



昭和44年5月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町6/2
井上重兵衛方 電(321) 1410
名古屋狂言共 同 社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(481) 7445

狂言人語

ゴールデンウィークで明けた五月、極東の緊張も、国内の学生運動も気にかゝりますが、能狂言会は年中でもいよいよ最盛期、数多くの好番組を取り揃えて皆様にお届けいたします。

目に青葉山時子鳥初鱈。能楽殿を取り囲む熱田の森の新緑は今が最も美しい時期です。小雨のけふる日曜日に、観能前の一刻を緑の木端からしたる水滴の下、しっとり濡れ、人足も遠のいた参道の玉砂利を静かに踏みしめる時、心はしらずしらずの内に古典の世界に入り込んで行くようです。

さて、今年度の第十一回朝日狂言会の番組が別記の如く決りましたのでお知らせ致します。今回は大蔵流の長老茂山千作氏他を、また和泉流からは宗家和泉保之氏、野村又三郎氏等を迎え名古屋狂言界総出演でにぎやかに上演致します。御期待下さい。

五月の催能

- 五月三日 謳調会
五月四日 名匠鑑賞能 (有料)正后始
能景 清 大西 信久 森 茂好
能千 手 観世 喜之 高安 滋郎
能小 鍛治 大西 信彦 森 茂好

- 狂 入間川 井上松次郎 佐藤卯三郎 井上礼之助
五月五日 巽会 (来聴歓迎)
能 橋弁慶 足立 学
能 胡蝶 植村 本子 西村 欽也
能 隅田川 井上礼之助
能 乱 戸田 和子 西村 弘敬
狂 舟ふな 大野 弘之 井上松次郎
狂 清水 佐藤 友彦 佐藤 秀雄
五月十一日 片山博通追善能 (有料)
能 郡 耶 片山博太郎 西村 欽也
能 隅田川 片山慶次郎 高安 滋郎
能 融 梅田 邦久 谷田宗二朗
狂 宗 論 井上松次郎 佐藤卯三郎
五月十七日 一謳会 (来聴歓迎)
能 鞍馬天狗 近藤 重次 西村 欽也
五月十八日 観会 唯子会
五月廿五日 正楽会別会 (来聴歓迎)
能 竹生島 岡部 藤平 高安 滋郎
能 間 山森 幸男
能 狸 々 井上礼之助
能 昆布壳 加藤丈太郎 西村 欽也
野村又三郎 井上松次郎

狂言解説

入間川永の在京で訴訟に勝ち新地も拝領し、暇をいただいた大名はなつかしい古郷に帰る途中入間川にさしかかりました。「入間言葉」は何でも物事をあべこべに云う言葉。さあ入間の某と大名との言葉遊びが始まります。

舟ふなは連れ立って遊山に出かけた主従。途中の川で渡舟を呼ぶとて冠者は「ふなヤイ」と呼かけます。主と冠者の間にまたぞろ「ふね・ふな」論が始まりました。

宗論は善光寺帰りの浄土僧と身延帰りの法華僧とが泊り合いました。珍妙な宗論から、題目争いとなりついに両者は題目をとり違えてしまします。

昆布売は見栄さばりのくせ、からっさし意気地なしの大名。連れ合った昆布売を無理矢理太刀持ちにさせました。が今度は逆に太刀で威され、昆布を売らされる破目になってしまします。

狂言内外

野村 広二

四月下旬、鎌倉に隠棲し給うY・Y氏に一文を呈す。美学者で、すぐれた芸術研究家であり、大通でもある。私事を省くと大体次のようであった。

鎌倉へお移りになつてはじめての新緑。二月のおたよりをおうけしてよりご無沙汰に打ちすぎました。近頃はお身体の方がいかがでございましょう。前便に浅酌微吟いつのことかとのくだりは何度も拝誦いたしました。わたくしもおこの頃は疲れが残るようになり、盃の数も少なく、おからの煮つけ、青菜

の胡麻あえに、みそなどなめております。ご在名のとき、行灯の火を追って深夜の彷徨と三笑の血気、天衣無縫は夢のようでございます。いつか観世寿夫論のご希望がありました。今しばらくお待ちください。今年になつて、まだ東京、京都、奈良、大和にも行っておりません。

さて、この中旬、北川民次氏女婿、加藤昭男彫刻展に参上。「鶏を追う男」の連作が狂言の味に通う佳品でございました。実は、先日、ある狂言研究会(大声会)で狂言の話をしていただきました。

喜劇一神、中心から人間へにはじまつて、狂言と能の生い立ち一能のなかの狂言、本狂言、小舞一狂言のおかしさと日本の笑いの三方面につづき、狂言のよさがわかるのは新しい眼と精神にもとづく自得によるうし、他方そこに共通の場ができていくが、その狂言とは、日本の芸術(芸能)がもつ、複雑のなかの単純、最後は自然に近かつこうとする二つの特色をもっているものですと結びましたが、あなたや谷川徹三先生のお蔭がいかに一杯であるかつくづくと考えていました。この四月下旬は紀州道成寺の鐘供養があるはづでございます。また二六日には「六段の美学」、五月に入り、三一日には「翁と三番叟」(教養特集、NHKテレビ)の話があります。また五月の国立劇場は、四月の平曲につづいて、管絃渡物の雅楽公演があるそうです。餽舌お許しください。」以上、五日の月が名古屋城の上にかききれいに夜に

したためた。本では、「能一伝統を支えるもの

(4) (戸井田道三、淡交四月) 「在原業平」(淡交四月) 「狂言と茶の湯(2)」(茶道雑誌四月、いづれも権藤芳一) 「ステージ能の舞台づくり」(増田正造、東京、四月中旬) 「喜多別会—後藤得三の鸚鵡小町」(今井欣三郎、読売、四月下旬) 「東京、名古屋、関西の狂言の人氣」(朝日、四、七) など。

しくじり談義

西村 弘 敬

言語といふは時代の移り変りに伴つて幾分の変化をするもののように思はれる。以前には失敗したといふのを「しくじり(縮尻)」といつたり或は不調法(ぶちようほう)したなどといふ言葉を使はれたこともあつたが、近頃はこんな言葉は余り用ひられなくなったように思ふ。

吾々が永年舞台を勤めて居る内には時々思ひがけなく色々な失敗をする事即ち「しくじり」を仕出来かす事も往々にあつた、こちらが失敗をして相手方に御迷惑をかけたたり、又相手方の失敗の為当方が迷惑を蒙る事も時々あつた。之れ等失敗談の色々の思い出を少々述べて見ようと思ひます。本来「しくじり」といふは勿論予期しない時に突然に起きるものであるが、又中には稽古が不充分とか或は調べ方が足りないなどの為めに起るものもあるが、之れは其人の責任であつて一般の「しくじり」とは言へないのである。今から相

当以前に私の社中の人で余所で教はつた事を種にして知つた振りをするのが其人の習性で、私の所へ稽古に来るのがいまいましいらしく困つた人であつた。或る時加茂の能の脇を勤めた時、謡の中に「新らしく壇を築き、白木綿に(しらゆふに)白羽の矢を立て」とあるのを「しろもめん白羽の矢」と謡つて大きに笑われて遂に其以後舞台に上るのをやめた人もあつた。

又次に之れは仕手方の或る大家で盛久の能に仕手が経文を唱へる所が二度ある最初の方は「或遭王難苦臨刑欲寿終云々」観音経の喝の一部を讀むのであるが、後の方は「種々諸悪趣地獄鬼畜生云々」と全様観音経の一部であるのを、最初の時に此後の方の経文を謡つたので相手をして居た私は一寸面喰らつた事がありました。従つて仕手は又後の方でも今一度全句を謡はなければならぬ破目になつた。然しこんな事は言句に詰まる即ち絶句程には目立たぬ失敗ではあるが之れも失敗の一つには相違ない。まだまだこんな失敗談はいくらもあるるので又の機会に御披露致します。

六月の予告

六月 五日 熱田祭協賛奉納能 (来聴歓迎)

一部 午前十一時始

- 能 九 竹腰 勝一 西村 欽也
- 能 井上松次郎
- 狂 清 水 井上礼之助 佐藤 秀雄

二部

- 能 百 萬 福井 道子 西村 弘敬
- 能 杭か人か 野村又三郎 佐藤卯三郎
- 六月 八日 橋岡久太郎追善能 (有料)
- 能 屋 島 橋岡 久共 西村 弘敬
- 能 江 口 観世 元正 高安 滋郎
- 能 葵 上 高橋 静夫 西村 欽也
- 能 無布施経 野村又三郎 井上礼之助
- 六月十五日 観 世 会 (有料)
- 能 養 老 大観 秀夫 高安 滋郎
- 能 百 萬 柴田初太郎 西村 弘敬
- 能 鉄 輪 片山博太郎 西村 欽也
- 狂 二千石 井上松次郎 井上礼之助
- 六月廿一日 宝 生 会 (有料)
- 能 井 筒 辰巳 孝
- 能 通小町 宝生 英雄
- 狂 因幡堂 佐藤卯三郎 佐藤 友彦
- 六月廿三日 朝日狂言会
- 六月廿九日 青 陽 会 (有料)
- 能 芦 刈 塚本 秀雄 西村 弘敬
- 能 野 宮 観世 武雄 西村 弘敬
- 能 鶴 飼 加藤丈太郎 西村 欽也
- 能 鏡 男 佐藤卯三郎 井上礼之助 佐藤 秀雄

昭和四十四年六月廿二日 午後二時卅分始
熱田 神宮 能 楽 殿
主催 朝日新開社
狂言 共同社

朝日狂言会

素囃子 吉田 定男
羯 鼓 田鍋 惣一郎
藤田 六郎兵衛

二人大名 野村又三郎 佐藤 秀雄
大 名 佐藤 秀雄

大原木 河村 丘造 佐藤 秀雄
小 舞 井上 祐一

膏薬練 茂山千之丞
上方ノ膏薬練
録音ノ膏薬練
木村 正雄

猿座頭 和泉 保之 井上 祐一
井上 松次郎
井上 豊弘

休憩

素袍落 茂山 千作 茂山千之丞
大 名 木村 正雄

六地藏 井上礼之助 大野 弘之
井上 義次
井上 松次郎

閉会 午後五分卅分頃

会 費 指定席 七〇〇円
普通席 五〇〇円
階上席 三〇〇円

取 扱 所 朝日新聞名古屋本社企画部
電話 八二一
中区裏門前町五ノ二 井上 方
電話 一四三〇

各出演楽師宅
各プレイガイド



昭和四年六月一日発行
 発行所
 名古屋市中区本町四丁目ノ二
 井上重兵衛方 電(321) 1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限公司 安井印刷所 電(481) 7445

狂言人語

月を周航したアポロ11号が、月面の貴重なフィルム、写真を持ち帰りました。いやはや時代の流れは恐ろしいもの、古人が月を眺め鏡と映して麗しきかくや姫を想った月も、現代人はにきび面、あばた面にしか形容しません。文明の進歩はいやでも古典の世界を、古典として隔絶したものに行きま

す。ところで暑くなりました。装束をつけて舞台上の一刻、楽屋に座して待つ間に、早やじつとりと汗ばむ候しはばらくは演者に辛い季節です。さて、今月の話題は朝日狂言会です。回を重ねること十一回を数え、東西各流各派の名人を招き、名古屋狂言師総出演で名古屋の皆様にお贈りして参りましたが、愛好者の皆様の暖かい手に支えられ、今年も盛大に催すこととなりました。ありがたく感謝申し上げます。とともに、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。次第です。

六月の催能

六月 五日 熱田祭協賛奉納能
 (来聴歓迎)

一部	午前十一時始	能 蟬丸	竹腰勝一	西村 欽也
能 清	井上松次郎	能 二部	井上礼之助	佐藤 秀雄
能 百	福井 道子	能 杭か人か	野村又三郎	佐藤卯三郎
能 屋	橋岡久共	能 奈須語	西村 弘敬	井上松次郎
能 江	観世 元正	能 葵	高橋 静夫	西村 欽也
能 養	大槻 秀夫	能 無布施経	野村又三郎	井上礼之助
能 百	柴田初太郎	能 六月十五日	観世 会 (有料)	
能 鉄	佐藤 友彦	能 二	井上松次郎	井上礼之助
能 井	辰巳 孝	能 六月廿一日	宝生 会 (有料)	
能 通小町	宝生 英雄	能 因幡堂	佐藤卯三郎	佐藤 友彦

六月廿二日 朝日狂言

午後二時三十分始

二人大名	佐藤卯三郎	野村又三郎	佐藤 秀雄
青葉棟	茂山千之丞	木村 正雄	
猿座頭	和泉 保之	井上松次郎	井上礼之助
素袍落	茂山 千作	木村 正雄	大野 弘之
六地藏	井上礼之助	佐藤 友彦	井上松次郎
六月廿九日	青陽会 (有料)	井上松次郎	西村 弘敬
能 野	観世 武雄	西村 弘敬	
能 鶴	加藤丈太郎	西村 欽也	
能 鏡	井上松次郎	佐藤 秀雄	井上礼之助

狂言解説

清水野中の清水へ茶の水を汲みに行かされた冠者、鬼が出たと偽り秘蔵の箱を捨てて逃げ帰ってしまいました。箱を拾いに出かけた主に鬼に化けた冠者が散々に感し、日頃の不満を晴らすのです。

杭か人か日頃の空腕立てをする冠者を試さんと留守を申付け主は外出しました。さあおそる／＼夜巡りを始めた冠者が暗闇に見つけたのは――。

無布施経壇家とどこおりなく勤めをすませた坊主、帰らんとするので肝心の御布施ができません。何とか思いださせようとやきまきする坊主と、

狂言内外

野村 広二

おっとりかまえた壇那――。二千石主に無断で京内参りをした冠者、いったんは手討になる所を許され乞われるまゝに都にはやる二千石の謡を謡った所、重ねて主の立腹をかってしまいました。主は二千石のめでたいいわれを語り、手討にせんと太刀のつかに手をかけると――。

因幡堂あまりの大酒呑みの女房に愛想をつかした男、因幡堂に申し妻をしてこもる所に、様子を聞き付けた妻がかつけ、自身が薬師になりすまし夢の告げでもって――。

鏡男永の在京の後故郷に帰る男、妻への土産にと一面の鏡を求めました。めずらしい鏡に道中も鏡の中の自分とにらめっこ。さぞ喜ぶだろうと妻に得意満面鏡を見せると――。

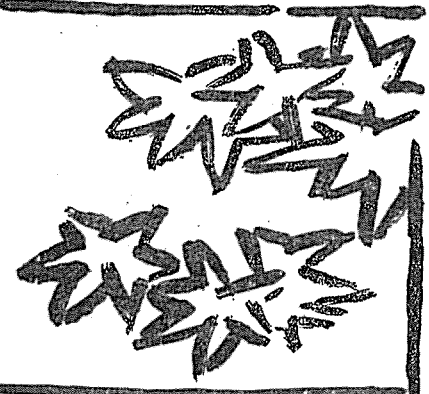
徳川園のぼたんをみにでかけたのは四月の末であった。その前後の雨で、もはやしおれかけはじめたのにまじって、いまを盛りに咲きほこる沢山の花の列を前にする。ぼたんの花には「楊貴妃」の銘があるのだろうか。桜にも梅にも、さつきにもあるのだからと、ぼたんと楊貴妃の粧いを結びつけながら、蓬左文庫の織茂三郎氏を訪ねた。久瀨を叙してから、ぼたんにはじまった話が、いつものようにいつか家康公と学問にうつっていった。週刊文春の新連載小説「忍法創世記」(山田風太郎)が、時代は南北朝、世阿弥が登場

することから、尊氏、秀吉、家康になつていったらしい。けさのなかにいような自然の深い息吹きを感じさせる。同行のS女史は熊沢五六館長に用事があつたが不在で、わたくしともどもあえなかつた。義直公所蔵の、三番叟と名付ける小鼓箱、虎渡三笑袴絵になつかしい唐人相撲の装束を目にする。北側の部屋の肩衣の突にこまかい柄をみたS女史は、これは最近のフランス流行の模様とよく似ているとうん蓄のある話をしてくれた。紅い唐人相撲の装束を思い浮べて、東西流通する文化のことにふれながら、静かなひる下りの上町の通りを、蓬左文庫や徳源寺による時間もなくて、少しく歩いた。この辺、建中寺から美術館までの一帯を、勝手に名古屋の文化地帯とよんでいるが、自分のつまつた心に聞いかけて、千里の外に目を向け、忙中の閑を得るには、まだまだ格好の区域です。それにかえりにNうなぎ店、梅や百日紅をみながら談笑するのも、楽しみひとつというものです。美術館の北側の壁に数多くの展覧会のきれいな掲示をみたが、それに誘われてか、五月の末、新幹線でA温泉にいき、熱海美術館をたづねた。四、五月の名古屋から西の新幹線は窓外の田植え風景だけでも変化に富むのに、平野と丘の間の走る東行新幹線は、お寺が二つ、三つしか目に止らなかつた。A町は八百屋が目につく町。駅の裏山の中腹にある美術館は、世界救世教会の建物の一隅で、仏鑑蟬師の「帰雲」の書や樹下美人図の出品はなかつたし、能、狂言関係の資料はみつからなかつたが、老儒仏混淆する白衣観音図、あじさいの見事な蒔絵箱に司馬江漢の遠い夢をさそうような画のほかには、一番奥の間

の京の三千院の仏様とおなじ三尊にあつたとは、いつまでも立っていた。絵はがきを求めて、若い係りの女の子と話していたら、この間名古屋をたづねた由、徳川美術館には行ったがとなりの建物には立寄れなかつたとのこと。蓬左文庫のことですね。二代目の殿様にお嫁入りしたお姫様ご持参の、絵入り徒然草がともきれいに、その当時そのままでありますよなど、記憶をたどりながら説明をして外へ出た。外は小高い丘の上から、ローマの別荘風の木立ちを通してみる海の青が、山の緑空の青とたくまぬ空間構成をつくってすばらしい佳景をみせてくれた。水際だつた狂言や、能のわざにみほれるような気がした。それもしばらく。やがて、みちたりたようなのどかさに入ってしまったが、ふと気がついたのは脚下照願の四字。急いで山をおりた。当日は、大蔵会の支恵法印記念狂言会をみに東京へとおもつたが、モダーンな東京まで脚がのびず、割愛する仕儀となつた。西の方は、四月について五月「鸚鵡小町」をみに京都へでかける。故野村三次郎百年祭記念能に金剛巖氏が舞つた。五月二十五日。「乱・広蓋之式」(金剛永蓮)。「鸚鵡小町」に「猿座頭」(千作、千五郎、千之丞、千三郎)をみてかえる。小町老女のオモテをつけた一時間五六分の小町のすばらしさは、記録する手をときどき止めさせたほど。たけたる位とか、失せぬ花とはこれをいうのであろう。「オモテ」にすいよせられたわたくしの心には、いうにいわれぬ詩的感動が打つては返えし、打つては返えししていた。「猿座頭」の千作は平家ガカリを巧みに語る。

西から来名、演能を多彩にしていたが、これは年末のレビューにとりあげることとし、五月では、故片山博通善能で「邯鄲」(博太郎)。「隅田川」(慶次郎)と二兄弟の活躍ぶりをみた。飾られた片山さんの笑い顔の写真から、「きょうはうまくまわれましたね」「いやくるしくしてくるくつかないませんでしたよ」などと飾らぬことばがかえってくるのも、楽屋のあの笑い顔からであった。狂言は「宗論」(松・礼・卯)。いつものなだらかさや緩急でなく少し重い調子で進めていった最後あたり、ぎすぎすしたかんじがした。これで回を重ねれば、また別の重い味がでてくるにちがいない。名古屋の催しは、M・レッチャー青年の陶器個展で、一つの小壺のカタチと、壺表面の感じから、余情があると告げてわかれた。余情を英訳して何といつてよいか考えつかないまま、「余情」といっておいしたが、あらためてM教授にうかがいたくおもつてそのままである。放送は、ラジオは「安宅」(後藤傳三)。「清経」(橋岡久馬)。「困栖」(金剛巖)。「小袖曾我」(桜間竜馬)。「杜若」(野村保)など。テレビは「日本の美」(野村保)など。テレビは「日本の国宝展から」中世の理解と、教養の基盤、教養特集、いづれもNHK)ほか。本では「能面」(中村保雄、PH P16)。「能の面」(同氏、河原書店、未見)。「薪能」(毎日、四四、五、二八)。「イミテーション狂言」(朝日四四、五、二九)。「平家琵琶」(祝言性) (山下宏明、朝日・研究ノート四四、五、一七)。「六月六日」(清信重、朝日・東海随想、四四、六、六)。「伊賀上野の田楽面」(週刊朝日・日本美発掘、六、六号)。「狂言」(終)

司子茶館
茶館茶館



中区丸の内一丁目五ノ二三
(23) 五七六九

「戸井田道三、悲劇喜劇六月号」「未
來への夢―わたしの帯の絵柄」(森田
たま、学燈四月号)など。
六月は十一回目を迎える朝日狂言会
。七月はやるまい会。どちらも盛會を
祈りたい。

しくじり談義(続)

西村 弘 敬

永年舞台を勤めて居ると、時には思
はぬ失敗をする事が随分ありました。
其多くは謡の文句に詰まる事即ち絶句
である。昔は絶句などは云はず「つ
まる」と言ったもので、後で考へて見
ると平素は良く覚へて居る謡で決して
忘れる様な文句でなく至極安氣に思っ
て居る場所、何か一寸気にかかる事
とか又は文句の一字か二字を謡ひ違ひ
した様な時に、ハツとすると思はず次
の文句をつまる事があるもので大休に
安氣して居る場合に何でもない箇所
つまる様な事があるので、却て遠い
謡は氣をつけて居るので殆ど謡ひ違ひ
や絶句は無いものである。私も道行や
待謡や一声の謡出しの句を何かの拍子
にフツと度忘れして謡へなくて立往生
した事もあります。先年鳥追船の能が
あって中入後一声の囃子につれて子方
シテを先に立て脇は一番後より幕を出
て丁度舞台の入口にかかった時に、素
人の人が後見に出て居て何を思ったの
か脇が歩んで居る前を横切つてシテの
方へ行かんとしたので、今当方が歩ん
で行く先を邪魔する様になったが其不

都合の所為に「カッ」と腹が立った為
舟に乗って、囃子の乞合で謡ひ出す所
へ来たのに文句が出て来ず暫く立往生
した事がありました。こんな事は余り
類のない事ではあるが兎に角に何か氣
にかゝる事が出来るという絶句の失敗
を仕出来かす事
になりません。永
年の間にはまだ
まだ色々のしく
じりは数へあげ
れば幾らもあり
ます。あまり名
譽でないので忘
れて居るが恐ら
くどなたにも失
敗はある事と思
ひます。

狂言玉手箱

擬音につ
いて――

「鐘の音」と
いう狂言がある
主が息子の成人
の祝に。黄金作
りの刀を作ろう
と思ひ、太郎冠
者に鎌倉へ行つて「黄金(かね)の値」
を聞いて来るよう云い付ける。粗骨者
の冠者は鎌倉で寺巡り「鐘の音」を聞
いて来る。
この曲の趣向は「黄金の値」と「鐘
の音」をとり違える所にある訳だが、
演技の中心は鎌倉の寺院の鐘を一つ一

薪能

午後 五時三十分始

昭和四十四年八月三日

於 熱田神宮境内

花 月 殿島 修二 高安 滋郎

千 鳥 野村又三郎 井上礼之助

舟 弁慶 内藤 泰二 西村 欽也

他ニ舞囃子 仕舞 大野 弘之

枕 慈童 内藤 泰二 西村 弘敬

羽 衣 長田 暁 高安 滋郎

墨 塗 和泉 保之 井上松次郎

土 蜘蛛 加藤丈太郎 西村 欽也

他ニ舞囃子 仕舞 大野 弘之

大衆能

第十回

昭和四十四年九月七日 午後二時始

於 愛知文化講堂

枕 慈童 内藤 泰二 西村 弘敬

羽 衣 長田 暁 高安 滋郎

墨 塗 和泉 保之 井上松次郎

土 蜘蛛 加藤丈太郎 西村 欽也

他ニ舞囃子 仕舞 大野 弘之

ついで巡る所にある。冠者は自身で
鐘をつき、その音が異なる様子を表現
しなければならぬ。
コン(寿福寺、音が少し固い)
パン(円覚寺、うわ調子な音)
ジャ モウ(極楽寺、良音)

破れ鐘

和泉流

雲形本

グワン(五大堂、

破れ鐘)

チーン(寿福寺、

小さい音)

コーン(極楽

寺、固い音)

ジャンモン(

建長寺、良

音)

大蔵流

山本東本

流儀、流派によ

り表現の仕方に差

異はあるが、とも

あれ、舞台効果、

照明、装置などを

全く用いない舞台

芸術たる狂言が生

み出した特異な演

出法である。

決して写実的だとは云えないが、見

事に狂言の擬音として生命を与えられ

ていると云えよう。

狂言の独特な擬音をいくつか紹介し

よう。

サラ(障子、戸等の開閉)

ぐわら(重い蔵の戸など)

ズカ(ズッカリ(のこぎり)

メリ(メリ(垣を壊す)

スツバリ(スパ(包丁の使用)

ピツカリ(ぐわら(雷鳴)

ヒシヤ(落雷)

ぐわらり(古天目を壊す)

サラリ(掛物を破る)

じゃが(わに口を打つ)

どんぶり(深瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

どぶ(浅瀬に石を投じた時)

玄恵法印と狂言

今年(昭和四十四年)は玄恵法印の入寂六百年記念に
あたる年という訳で、大蔵流を中心に
多くの記念行事が計画されている。こ
の六月一日にも東京で記念の能と狂言
の会があるが、この玄恵と狂言との関
わりについて少し触れておこう。

云うまでもなく叡山の高僧で権大僧都の位にあつた人であり、「庭訓往来」を著し、また「太平記」の著者にさえ擬せられているほどで、大藏流ではこの玄恵を流祖としている。

玄恵を狂言の作者とする所伝は古くからの云い伝えで「わらんべ草」にも見えており、「狂言不審紙」では玄恵法印作として五十九番の曲名が挙げられている。それによると釣狐、花子の大曲、未広がり、靱猿、萩大名、宗論など代表的な曲がずらり揃っている。

もち論、これを額面通りに信ずるわけにはいかないし、また仮に一応の肯定をしたとしても、当時の姿と今日の舞台との間には、原作の面影を殆どとどめない程の流動、変遷の歴史が横たわっているわけである。当初の舞台はほんの筋立てだけで細部の演出、科白なども演者に委ねられ、時には即興的演技も交えられていた狂言の作者は、むしろ時代々々の狂言師達、狂言を支えた民衆全体の創造と見る方が妥当と云えよう。しかしながらその狂言が、玄恵の作と伝えられるのは、あなたがち後世の権威づけとして否定するだけではなく、玄恵の時代、叡山の学僧達、叡山と関連の深い近畿の農村、そこに伝わる猿樂、田楽——玄恵はこれらすべての狂言とのつながりを暗示しているとも云えるだろう。

七、八、九月の予告

七月 六日 調友会 (有料)
能 舟弁慶 梅若 猶義 西村 欽也
間 佐藤 秀雄

狂 田 植	佐藤卯三郎	井上松次郎	佐藤友彦	大野 弘之	七月二十日 やるまい会 (有料)	狂 牛 盗 人	井上松次郎	井上 豊弘	鬼頭 秀治	狂 水 掛 鞆	茂山千之丞	茂山 正義	狂 繩 綯	野村又三郎	野村 秀治	狂 井 杭	野村万之丞	野村 悟郎	狂 首 引	野村 万作	佐藤友彦	野村 悟郎	鬼頭 秀治	久保 克人	井上礼之助	七月廿七日 藤門会 ゆかた会	八月 三日 薪 能	於 熱田神宮境内	八月 十日 淡水会 素謡会	八月十七日 協会名古屋支部半歌仙会	八月廿四日 笙月会 ゆかた会	九月 七日 大衆能 於 文化講堂	九月十四日 観世会 素謡会	九月十五日 婦人師範連合会	九月廿一日 名古屋全春会 素謡会	九月廿三日 清韻会	能 蟬 丸	三島 憲	西村 欽也	能 羽 衣	佐藤卯三郎	西村 欽也	能 望 月	大槻 秀夫	西村 欽也	能 萩 大名	井上礼之助	高安 滋郎	狂 萩 大名	大野 弘之	佐藤友彦	佐藤 秀雄	九月廿八日 松韻会 素謡会	内藤 純子	小鼓石橋波	田鍋社中
-------	-------	-------	------	-------	------------------	---------	-------	-------	-------	---------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	----------------	-----------	----------	---------------	-------------------	----------------	------------------	---------------	---------------	------------------	-----------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	--------	-------	------	-------	---------------	-------	-------	------

協会よりのお知らせ

内藤 純子 小鼓石橋波 田鍋社中

舞 見 中 暑

一 謡	河 村 鉦	二 会	藤 門	加 藤 良	久 会	長 生	鬼 頭 八	郎 会	中 部 金 春	前 田 昌	広 会	竜 吟	藤 田 六郎兵衛	會 会	観 衛	田 鍋 惣 太 郎	會 会	霞 水	林 甲 子	夫 会	潤 水	野 崎 太	郎 会	観 正	久 田 秀	雄 会	高 安	高 安 滋	郎 会	た な び き	田 鍋 惣 一 郎	會 会	舞 雲	内 藤 泰	二 会	調 友	内 藤 泰	二 会	名 古 屋 能 楽 鑑 賞 会	田 鍋 惣 太 郎
-----	-------	-----	-----	-------	-----	-----	-------	-----	---------	-------	-----	-----	----------	-----	-----	-----------	-----	-----	-------	-----	-----	-------	-----	-----	-------	-----	-----	-------	-----	---------	-----------	-----	-----	-------	-----	-----	-------	-----	-----------------	-----------

名 古 屋 能 楽 俱 楽 部	植 村 真 太 郎	風 韻	殿 島 修	二 会	幸 友	福 井 啓 次 郎	會 会	金 剛 流 松 風 社	片 野 東 四 郎	會 会	掬 水	柴 田 初 太 郎	會 会	曲 水	増 田 一 雄	會 会	春 鶯	山 田 仁 三 郎	會 会	正 樂	加 藤 丈 太 郎	會 会	松 謡	佐 藤 太 俊	會 会	清 風	大 塚 一 二	社 会	青 陽	會 会	能 楽 名 古 屋 支 部	協 会 支 部 長 田 鍋 惣 太 郎	名 古 屋 和 泉 会	名 古 屋 和 泉 会	狂 言 共 同 社	(イロハ順)
-----------------	-----------	-----	-------	-----	-----	-----------	-----	-------------	-----------	-----	-----	-----------	-----	-----	---------	-----	-----	-----------	-----	-----	-----------	-----	-----	---------	-----	-----	---------	-----	-----	-----	---------------	---------------------	-------------	-------------	-----------	--------



昭和44年9月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前5/2
井上重兵衛方 電(321)1430
名古屋狂言共闘社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(481)7445

狂言人語

九月、残暑のまだく敵しい季節ですが、それと共に台風の怖いシーズンとなりました。特に本年は大型台風の上陸が噂されており、皆様にも充分に御注意下さい。

さて、能狂言界もいよいよ後半期に入り、その開幕を飾って九月七日「大衆能」が愛知文化講堂で開催されます。この「大衆能」も今年で十年、名古屋市民の皆様にも多く、この古典に親しんでいたごきと願いのもとに、在名楽師の努力と、県、市を初めとする諸団体の惜しみない御後援そして愛好者の方々の熱意とに支えられ、立派に成長して参りました。十年ひと昔、「大衆能」も今や新しい段階に入りました。今日までの確実な足跡を確かめつゝ、ゆるぎない伝統を自覚し明日の斯界の発展の大きな礎石としたいものです。

ところで先のアポロ十一号の月着陸と帰還の成功以来、世はまさにアポロブーム、文字通り人類にとっては偉大な飛躍を成し遂げたわけで、いよいよ私達の夢、無限の宇宙空間を現実にかきおろして参ります。この壮挙を記念して三宅藤九郎氏より新作小舞謡「月に立つ」の玉稿を拜りましたので、皆様に御紹介させていただきます。

たゞきます。

新作小舞謡

月に立つ

月に立つ△人はよるこび浮きく△と△両足揃えうさぎ飛び△尻餅ついて月面に△滅入り込うでは一大事△足跡残しそのままに△地球の国へ帰りけり△

昭和四十四年七月作

藤九郎

九月の催能

- 九月 七日 大衆能 於 文化講堂
- 能 枕 慈童 内藤 泰二 西村 弘敬
- 能 羽 衣 長田 暁 高安 滋郎
- 能 墨 塗 和泉 保之 井上松次郎
- 能 蜘蛛 加藤文太郎 西村 欽也
- 間 大野 弘之
- 九月十四日 観世会 素謡会
- 九月十五日 婦人師範連合会
- 九月廿一日 名古屋金春会 素謡会
- 九月廿三日 清韻会

狂言解説

墨塗 遙か遠国の大名、永の在京の後晴れてめでたく帰郷することになり在京中馴染の女に別れを告げに参りました。それを聞いた女の涙、大名もたまらず泣き出してしまいました。ところが涙と見えたは鬢水入れの水、それを見つけた太郎冠者が水と墨とを取りかえておきました。

萩大名 やはり遠国の大名、帰郷の前に清水へ遊山に出かけました。茶屋の庭先で亭主の自慢の庭をほめたあと萩の花によそえて、一首よむことになりました。あらかじめ用意の歌を冠者に教えられながら詠むのですが、最後の一句、気が付くと冠者がいません。

狂言花野

野村 広二

八月二十二日の台風が遠く過ぎるとにわかに動き出した秋の気配が暑さにくだつた心に落着きを与えはじめ、庭の木立の間には十日頃の月さえかすんでかかり、かねたたきやおそろぎなど鳴きだし、松虫までまだごちない声を出しはじめました。二十四日、大阪

- 能 蟬 九 三島 幸江 西村 欽也
- 能 望 月 衣 大槻 秀夫 西村 欽也
- 能 間 井上礼之助 高安 滋郎
- 狂 萩大名 大野 弘之 佐藤 友彦
- 九月廿八日 松韻会 素謡会

能楽会館で、催された玄恵法印生誕七百年記念狂言会でおあいした金剛夫妻とそんな時候のあいさつをかわしあった。その時の同氏の「善我意、白頭」は帰名の時間が迫るのに足が立たないほどの見事さであった。この夏は、六月の朝日狂言会につづいて、七月はやるまい会。「縄ない」(又三郎)は秀逸だった。この二つの狂言会で、東は万之丞、万作、悟郎三兄弟、西は千作翁をはじめ千五郎、千之丞両氏に正義君の来名をえて、「素袍落」(千作)と「井杭」(万之丞ほか)で東西のちがつた明るさを味わう。同じ月、京都の玄恵法印記念狂言会に招かれて上洛。「釣狐・白式」(大蔵太郎)、「石神」(千作・山本則寿)、「入間川」(善竹忠一郎)の佳品をみる。なお大阪では、名古屋和泉流が、「蚊相撲」(松・秀・礼)で参加。その佳きを大層律義にみせていたことをあわせてお知らせしたい。くわしくは四四年の回顧にゆづります。

さて、夏休みをとることが流行みたいな年でしたが、わたくしも六月にお話した熱海美術館と姉妹館である箱根美術館へでかける。蓬左文庫の織茂三郎氏から預ったしおりや絵葉書を、ただいま休館中の熱海の方へことづけでもらう。美術館のある強羅周辺はどうだんの木が多い処、むくげもきれいで、終日蟬がなき、またうぐいすもないうを求めた。暑い日盛り、美術館でみた織部の水注や古常滑の瓶、陶器の枕をふと思ひ浮べた。放送は「弱法師」(宝生弥一、森茂好ほか)。本は

「芝居についての芝居」(加藤周一)「婦林鳥語」(吉川幸次郎、ともに図書七月)「釣りと禅」(観世喜之、大法輪八月)「辻能ほか」(なごや芸能風土記、関山和夫、朝日、八、二三)など。

九月は大衆能の盛會を祈りたい。

蘇命路

西村 弘 敬

近来科学の進歩は著るしく、従来夢想もして居なかつた月へ人間が行つて着陸し刺へ岩石を持ち帰つたなどと、全く驚くべき奇蹟が出来て居るのに、一方又之れは何其説明のつき兼ねる奇蹟の事実があるのを一応御紹介して見ます。

現今各流にある謡曲の中に歌占(うたうら)といふ曲がある、其筋書は伊勢の二見の神主が或る神罰にて一旦頓死したるに程なく蘇生し、加賀の国の白山の麓の辺りに行き往來の人々の求めに依りて和歌による占(うらない)の判断をして居た時に、一人の男が父の病気の吉凶を尋ねに來たが歌の短尺を引ひたれば、

北は黄に南は青く東しろ
西くれないに蘇命路の山

といふ歌が出た。此歌は仏教で云ふ極楽(ごくらく)の須弥山、(しゆみせん)を讀んだ歌で、此蘇命路といふ文字は本来染色と書くべきを此文字を当てて用いたもので「よみがえる命のみち」と読み替へると誠に目出度き意を表はすにより父の病氣は程なく平癒す

ると判断してやつた事が作られてある。私は此の蘇命路といふ文句が何となく縁起がよろしく目出たき意味を感じて居たので、先頃より短冊や色紙或は紙片などに之れをしたためて人々に差し上げて居ます、最初差し上げた人は七十三才の老婆でしたが或る時自宅の前で自転車に跳ねられ腸が切断といふ重傷を負ひ直ちに外科病院にて手術を受けたるも何分にも老体の事として回生は覚束なからんと思つて居た処、追々と経過よろしく約二ヶ月程で退院し其後十年程無事に暮して居る。

又今一人の人は之れも交通事故にて後頭部の頭蓋骨折にて脳がはみ出す程の重傷であつた処、大学病院にて入院手術の結果殆ど後遺症もない程に治癒回復し元々通りに活動して居られる。又岡崎の御婦人で癌(がん)の為入院中の所追々と回復遂に退院して礼に來られた。此の外随分大勢の方々が負傷が思ふより軽く済んだり又病氣が思ひの外早く治癒したなど色々の奇蹟が山積して居て大勢の人々から非常に悦ばれて居る次第で或は一種の迷信かの様にも見へるが、何共不可思議といふ外ない次第で、若し御希望あらば御申越下さい、どなたにも書いて差し上げます。

十月の予告

十月五日 風韻會 (来場歓迎)

- 能 清 経 多久島利之 高安 滋郎
- 能 松 風 殿島 博子 西村 欽也
- 能 左藤アヤ子 佐藤卯三郎

半能融 渡辺 節子 西村 弘敬

狂 柑 子 佐藤 友彦 井上礼之助

能 阿古木 金剛 巖 西村 欽也

能 紅葉符 豊島三千春 高安 滋郎

能 佐藤 秀雄 佐藤 友彦

狂 狐 塚 佐藤卯三郎 大野 弘之

能 羽 衣 赤間 鎮雄 西村 欽也

狂 柿山伏 井上松次郎 井上礼之助

能 藤 戸 久田 秀雄 高安 滋郎

能 班 女 佐藤 太俊 西村 欽也

能 熊 坂 井上松次郎 佐藤 秀雄

能 雁 磔 佐藤卯三郎 大野 弘之

狂 隅田川 奥田 敏子 井上礼之助

能 通小町 観世 武雄 福王 輝幸

能 半 菰 観世 喜之 植田隆之亮

能 融 大江又三郎 福王 輝幸

能 地蔵舞 井上松次郎 佐藤 秀雄

能 名匠鑑賞會 (有料)

十月廿六日 橋風會 (有料)

能 隅田川 奥田 敏子

能 通小町 観世 武雄 福王 輝幸

能 半 菰 観世 喜之 植田隆之亮

能 融 大江又三郎 福王 輝幸

能 地蔵舞 井上松次郎 佐藤 秀雄

能 名匠鑑賞會 (有料)

十月廿六日 橋風會 (有料)

能 隅田川 奥田 敏子

能 通小町 観世 武雄 福王 輝幸

能 半 菰 観世 喜之 植田隆之亮

能 融 大江又三郎 福王 輝幸

時 昭和四十四年十一月十五日(土) 午後 三時始

所 熱田神宮 能楽殿

主 権 名古屋和泉會 狂言 共同社

第九回 和泉會

二人袴 友彦 河村 丘造

柑子儀 保之 井上礼之助

無布施経 萬藏 井上松次郎

止動方角 井上松次郎 友彦

會費 指定席 七〇〇円

普通席 五〇〇円

階上席 三〇〇円

入場券取扱所 市内プレイガイド 但十月十日発売

市内昭和区駒方町三ノ三 法普寺内

河村 丘造方 電話(八三二) 七一三五

市内守山区小幡翠松園 電話(七九一) 三〇二八

市内北区豆園町二ノ五三 電話(九一) 八七八四

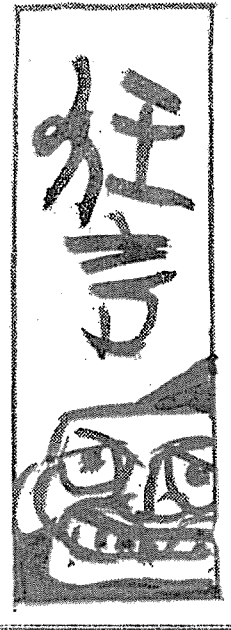
佐藤卯三郎方 電話(七九一) 三〇二八

佐藤 秀雄方 電話(九一) 八七八四

井上礼之助方 電話(五六一) 一七八七

市内中区裏門前町五ノ二(事務所) 電話(三二二) 一四三〇

井上松次郎方 電話(三二二) 一四三〇



昭和44年10月1日発行
 発行所
 名古屋市中区裏門前町6/2
 井上重兵衛 電話(321) 1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電話(481) 7445

狂言人語

昨日まで白の目立った街頭も一夜明ければ衣替え、背広一色となりました。風の快い涼しさも今しばらくのこと。肌寒さを覚える頃になると北から南へ山から里へと木々が色付き始め、自然界の素晴らしい衣替えとなります。華やかな秋は、同時に冬の厳しさをその底に感じさせるもの、厳しい華やかさ、そしてはかなさ、悲しさ。能を愛する私共には秋はより深い味わいを感じさせてくれるものです。

さて十月は芸術の秋にふさわしく多彩な催しが操り広げられます。当地名古屋の名古屋祭も市制八十周年を記念して盛大に催されますが、能会でも市民古典邦楽鑑賞会がこの十一日に開かれるのを初め、金剛会、青陽会、そして名匠鑑賞能と豪華な番組が揃えられ必ず皆様に御満足いただけることと思えます。

ところで別掲の通り第九回和泉会の御案内を申し上げます。今回は和泉流の長老、人間国宝野村万蔵氏を迎え、その至芸を無布施経で御覧いただくのを初め、和泉宗家、野村又三郎氏

等に共同社総出演でお送りします。どうか御期待下さい。

十月の催能

- | | | | | | | | | | | |
|-----------------|-------------------|-------------------|------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-----------------|
| 十月五日 風韻会 (来場歓迎) | 能 清 経 多久島利之 高安 滋郎 | 能 松 風 殿島 博子 西村 欽也 | 能 阿古木 金剛 巖 西村 欽也 | 能 紅葉狩 豊島三千春 高安 滋郎 | 能 狐 塚 佐藤 友彦 大野 弘之 | 能 羽 衣 赤間 鎮雄 西村 欽也 | 能 柿山伏 井上松次郎 井上礼之助 | 能 藤 戸 久田 秀雄 高安 滋郎 | 能 班 女 佐藤 太俊 西村 欽也 | 能 間 井上松次郎 佐藤 秀雄 |
|-----------------|-------------------|-------------------|------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-----------------|

- | | | | | |
|-------------------|-------------------|-------------------|---|---|
| 能 熊 坂 山本 真義 高安 滋郎 | 能 雁 磔 佐藤 友彦 大野 弘之 | 能 隅田川 奥田 敏子 井上礼之助 | 能 通小町 観世 武雄 橋岡 久馬 福王 輝幸 福王 輝幸 観世 喜之 植田隆之亮 植田隆之亮 佐藤 友彦 | 能 大江又三郎 鈴木 一雄 福王 輝幸 井上礼之助 地蔵舞 井上松次郎 佐藤 秀雄 |
|-------------------|-------------------|-------------------|---|---|

狂言解説

柑子II 昨夜預った三つ成の柑子を出す様に云われた冠者。とつ々の昔に柑子は腹中に取っており、その云いわけは……。

狐塚II ようよう田に稲の実る時分、主は太郎冠者に田の番に行かせたのですが、憶病者の冠者は見舞に来た次郎

冠者、主を狐と間違え次々に縛り上げてしまいました。正体を現せと煙でいぶし、皮をはがんとて……。

柿山伏II 行力の強い山伏も空腹には叶いません。無断で柿の木に上り柿を失敬している所を柿主に見付かってしまいました。あわて、隠れた山伏は猿よ犬よと柿主に、散々なぶられた挙句、驚の真似をさせられ、木から落っこちてしまいました……。

第九回 和泉会

名古屋市民芸術祭参加

時 昭和四十四年十一月十五日(土) 午後 三時始

所 熱田神宮 能楽殿

主催 名古屋和泉会 狂言共同社

二人袴 舞 大鼓 寛 小鼓 田 鍋 太 藤 田 六 郎 兵 衛

男 舞 友彦 河村 丘造 秀雄 大野 弘之

柑子 俵 男和泉 保之 子 井上 豊弘

無布施経 借野村 万蔵 某 野村又三郎

止動方角 大 冠者 佐藤 卯三郎 借 友彦 大野 弘之 井上松次郎 馬 佐藤 友彦

閉会 六時頃

会費 指定席 七〇〇円 普通席 五〇〇円 階上席 三〇〇円

雁磔II 例の格好ばかりの大名、今日も野へ狩に出かけました。見付けた一羽の雁を射んとする所、通行人が先に磔で倒してしまいます。

さあ大名は、俺がねらい殺しておいた雁だ」と云つて聞きます……。

地蔵舞II 旅の出家、宿を取ろうとするのですが所の大法で一人旅人には宿を借してくれません。そこで笠を預けその笠の下にもぐり込みました。笠に宿を借りた出家は宿の亭主と酒盛の上、地蔵舞を舞います。

狂言内外

野村 広二

九月下旬、風邪で気分すぐれぬまま二十八日の日曜日。「六歌仙容彩(ろつかせんすがたのいろどり)」を、坂東三津五郎の五役でみる(NHKカラテレビ)。小野小町は中村芝翫、お梶は中村歌右衛門、一手管(てくだ)の学問」という喜選法師のせりふが心に残る。楽しい一時間半であった。その前の二十六日は、恐れた台風11号もこず、名月の夜を迎える。

急にはだ寒さをおぼえる夜の空にきれいなまるい月がのぼっていく。庭のすずきやはぎを供えた。二十三日は彼岸の中日。めづらしい喜多流の「大会」と和泉流の「業平餅」をみ損ねて、よる、谷川徹三先生の「日本の美の系譜」(東京、日本伝統工芸講演展)をFMで聞いた。九月は大衆能のほか能会に行かなかった。この「墨塗」(保之・松・友)はなかなかおもしろい。催し物にはよく出かけたが、松坂屋の明治、大正、昭和絵画展では、日本の画に幽玄のような伝統の美をみず、かえって外国画家の方に、ポナールの「少女」に、おちついた黒めがちのこの絵に、能の美しさに通うものをつけた。不思議である。日本伝統工芸展では、朝日賞をうけた増田三男氏の打出竹林水指がやはり能の持つ深遠さを汲みとらせてくれた。院展は、本年も森田曠平氏が「隅田川」を発表。どちらも名古屋の公開が待ち遠しい(大会以下いづれもNHKテレビとFM)。

故橋岡久太郎氏の追善能や豊嶋弥左衛門氏の「道成寺・古式」の案内状を受け、秋の旅行にさそわれることしきりである。放送では、「景清」(金春信高)、「遊行柳」(豊嶋弥左衛門)、「玉葛」(福岡周斎)。本は、「日本の巫流に支えられた栄光」(大島辰雄芸術新潮八月)、「世阿弥の花鏡」(原随円)、「花の心と能の心」(中村保雄)どちらも、茶道雑誌八月)、「能面・瘦男」(小山富士夫、骨董百話・九、芸術新潮九月)、「坂本繁二郎追憶」(谷川徹三ほか、心九月)、「追憶坂本繁二郎」(馬屋の月ほか、芸術生活十月)など、

大声会便り

会が発足してから丁度一年を迎えんとする所です。誠に月日の流れは早いものです。月一回の例会を中心に、その他週一回の狂言教室を開室し、何とか一年を過ぎて来ました。そこでこの一周年を記念してこの度旅行をすることにいたしました。秋の一日を京都山科から宇治へ、共同社諸先生と会員達と、古典を語り、古典の故郷を訪ねる旅、いずれ帰りましたらば御報告させていただきます。

日時 十月十九日(日)

目的地 京都山科西宗寺、醍醐、日野、宇治(マイク robes)

なお、大声会へのお問合せは左記へ

(電) 九二一—八七八四(佐藤)

十一月の予告

- 十一月 二日 九阜会 (来場歓迎)
 - 能 班 女 田中きんこ 高安 滋郎
 - 狂 竹生島参 佐藤 友彦 井上松次郎
- 十一月 三日 橋岡久太郎七回忌追善能
 - 能 半 薨 早川喜美子 西村 弘敬
 - 間 佐藤 秀雄
 - 能 天 鼓 伊藤 長八 西村 欽也
 - 間 井上松次郎
- 狂 盆 山 野村又三郎 井上礼之助
- 十一月十五日 和泉会 午后三時始
- 十一月十六日 観世会 (有料)
 - 能 竜 田 山本 博之 西村 欽也
 - 間 井上礼之助
 - 能 隅田川 梅若 六郎 高安 滋郎
 - 能 殺生石 上田 照也 高安 滋郎
 - 間 佐藤卯三郎
 - 狂 寝音曲 和泉 保之 井上松次郎
- 十一月廿三日 観衛会
 - 能 天 鼓 加藤 歌子 高安 滋郎
 - 間 井上松次郎
- 十一月廿九日 南山大学宝生会学生能
- 十一月卅日 竹韻会

協会よりのお知らせ

杉本みち氏 能千手披 竹内社中

貴金属加工卸

ニューデザインは是非当店へ

株式会社 石原商会

名古屋市昭和区前山町1ノ39 電話 (762) 6355~6



昭和十四年十一月一日発行
 発行所
 名古屋市中区奥門前町6/2
 井上重兵衛方 電話(321) 1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電話(481) 7445

狂言人語

秋もいよ／＼深まり、青い空と紅い木々との原色の自然が目映え、吹く風もまた肌をひきしめず。行楽に、芸術に、また食欲に、この束の間の秋を存分にお楽しみください。悪い風邪が流行っております。お身体の方もくれ／＼も大切に。

この秋を飾って名古屋狂言界がお贈りします第九回和泉会、別掲の如く豪華な番組を取揃えております。是非ともお見逃しなきよう。

十一月の催能

- 十一月 二日 九阜会 (来場歓迎)
 能 班 女 田中きんこ 高安 滋郎
 狂 竹生鳥参 佐藤 友彦 井上松次郎
- 十一月 三日 橋岡久太郎七回忌追善能
 能 半 部 早川喜美子 西村 弘敬
 能 天 鼓 伊藤 長八 西村 欽也
 狂 盆 山 野村又三郎 井上礼之助
- 十一月十五日 和泉会 午后三時始
- 十一月十六日 観世会 (有料)

狂言解説

- 能 竜 田 山本 博之 西村 欽也
 能 隅 田川 梅若 六郎 高安 滋郎
 能 殺 生石 上田 照也 高安 滋郎
- 狂 寝 音曲 和泉 保之 井上松次郎
- 十一月廿三日 観世会
 能 天 鼓 加藤 歌子 高安 滋郎
- 十一月廿九日 南山大学宝生学生会能
- 十一月 卅日 竹韻会

竹生鳥参主に無断で抜け参りをした冠者、主の激怒に合いますが、機嫌を直そうと人から聞いた話をして、くちなわの秀句につまづいてしまします。この言語遊戯である秀句を扱った物は他に秀句傘、薩摩守、酔辛、今参などがあります。

益山川流行の益山を手に入れたいと知人の家へ盗みに入った男、家主に見つけられて植込みの蔭に隠れました。家主は散々になぶって追い返そうと、次々に犬、猿、鯛の真似をさせて追込みます。同趣向の物に柿山伏がありま

狂言内外

- 野村広二
 十月も末の朝
 白い月がよく晴
 れた西の青い空
 にかかると。菊の
 蕾はまだ固いが
 一枝、二枝仏前
 に供える。この
 月は、十九日に
 京都で、「三輪
 ・神道」(豊嶋
 弥左エ門)をみ
 る。東本願寺前
 の大銀杏の葉が
 もう黄色になつ
 ていた。狂言は
 「蝸牛」(茂山
 忠三郎)。三輪は稽古を積んで得た、
 冷めたくひきしまつてしかも柔らかい
 美しさを十二分に味わせてくれる。カ
 タチはいうまでもなく美しい。
 二十一日は伊勢神宮の文化殿が完成
 し、その初演能の日である。能、狂言

寝音曲は謡がうまい冠者、度々謡わされては叶わぬと酒を呑まねば、女の膝枕でなければ声が出ぬ、と注文をつけますが、主はその条件を満し、主を膝枕に謡うことになりました。

のほか、諸芸能奉納に使われる構想らしく、四間四方の舞台に、もちろん橋掛がついて、観客席が三方から舞台を囲み相当広い内庭をへだてて見物できるよう、古風でモダンな建物にできあがっている。柱は登場者を一瞬かくしてしまおうと、鏡板の松が竹の画の方へのびているのも目立つ。シテ方五流と狂言二流の参加で、「翁」は喜多夷、三番叟は大蔵弥太郎の両氏。和泉流は伊勢にゆかりの深い「素袍落」(保之、松、礼)であった。一番若いシテは金剛永護(ひさのり)君。田村のハヤシを、立派にまう。よい思い

附祝言

- 狂言 紅葉 狩 福井密次郎 池田 茂
 能 舟 弁 慶 河村総一郎 前田 昌広 服部 沙枝
 狂言 二九十八 高安 滋郎 西村 欽也
 狂言 三井寺 道行 観世 喜之
 狂言 女 郎 花 鬼頭喜太郎 内藤 泰二 佐藤卯三郎
 狂言 三井寺 道行 観世 喜之
 狂言 昆 布 売 戸田 秀雄 河村 鉦二
 狂言 小 督 鬼頭 季信 有賀 滋子 塚本 秀雄
 狂言 通 小 町 鬼頭 八郎 長田 久馬 衣斐 正宣
 狂言 松 風 井上松次郎 和泉 保之 殿島 修二
 狂言 見 留 前田 昌広
 狂言 女 郎 花 鬼頭喜太郎 内藤 泰二 佐藤卯三郎
 狂言 三井寺 道行 観世 喜之
 狂言 舟 弁 慶 河村総一郎 前田 昌広 服部 沙枝
 狂言 二九十八 高安 滋郎 西村 欽也
 狂言 紅葉 狩 福井密次郎 池田 茂
 狂言 舟 弁 慶 河村総一郎 前田 昌広 服部 沙枝

昭和四十四年十二月廿一日 正午始
 能 楽 殿
 狂言 登場者を一瞬かくしてしまおうと、鏡板の松が竹の画の方へのびているのも目立つ。シテ方五流と狂言二流の参加で、「翁」は喜多夷、三番叟は大蔵弥太郎の両氏。和泉流は伊勢にゆかりの深い「素袍落」(保之、松、礼)であった。一番若いシテは金剛永護(ひさのり)君。田村のハヤシを、立派にまう。よい思い

出になるであろう。喜多夷氏とは同氏新著「演能前後」の話をした。二十六日の名匠鑑賞能(観)では橋岡久馬氏に、久々お目にかかる。いそがしい同氏と短かい時間であいさつをかわす。鼻下の美しいひげがよく似合う。シテとツ

レ(観世武雄)の装束がよい調和をとりだし、充実感にあふれた舞台であった。橋岡の花である。そして、能芸美を追求する孤立の感が強く迫ってきた。催し物は九月につづきよくでかけた。院展。「隅田川」(森田曠平)の絵はがきを買う。徳川美術館の信楽丹波陶器展。古ガメのくすんだ色とカタテは能の冷めたさに通ずる。きれいに晴れた日で、かえりに蓬左文庫の織茂三郎氏をたづねる。実にしづかなひとときを得た。園内の銀杏のいろづきが例年より十日も早い由。こちらからは、ここに来る前、徳源寺で大きな木魚の音が腹にしみわたる読経を三十分余りも聴聞してきたと告げた。名鉄百貨店の中部画壇六〇人展にも。片岡球子さんの八仙と還城楽の屏風をみに。また浮世絵名作展で庶民遊楽図屏風をみに。オリエンタルのオリエント展も。舞楽の布作面や、ベシミのあかい色をおもわせる皿の画や土器にであう。あわたたしい十月であった。

十一月は、名古屋和泉会に期待したい。

曾我づくし

西村弘敬

謡曲の題材には色々の物語類若くは歴史の事実などが相当多く用ひられて居る。物語といへば源氏物語を始めとして平家物語、伊勢物語、大和物語、其他源平の戦争の物語類、其他歴史上の色々の事実、或は平安朝時代の色々の出来事と教へ上げれば其種類は沢山あります。例へば小野小町の事だけでも草紙洗小町、卒都婆小町、鶯嶋小町、関寺小町、通小町、など同一人物についても五通りもある。次に曾我兄弟

に關しては左の通り六曲ある。

切兼曾我(まきかねぞが)

調伏曾我(ちようぶくそが)

元服曾我(げんぷくそが)

小袖曾我(こそでぞが)

夜討曾我(ようちぞが)

禪師曾我(ぜんじそが)

明治の中頃(日時不明)に当地の能楽師の連中で、之れ等の曲は常に上演せられるのは至つて少なく、多くは名は有つても上演せられる事がないのでお互の研究の爲に是非一度研究上演する事に相談が経まり、曾我づくしとして一日の能を催す事とした。其場所や日時など今の処一寸不明であるが兎に角に面白かるふという事であった。其時に例の洒落家(おしやれ家)の伊勢門水氏が「曾我づくし」を「蕎麦づくし」(そばづくし)ともじつて、恰も蕎麦屋の店先の口上書に似せて

切兼そば 何程
調伏そば 〃
元服そば 〃
小袖そば 〃
夜討そば 〃
禪師そば 〃

右御注文に応じ美味に調進仕るべく候。と大きく書き出して楽屋に貼り出して人々に大きに洒落氣を披露せられた。

十二月、一月の予告

十二月六日 柳原富司忠 職分披露能

二人静 観世 壽夫 西村 欽也

望月 佐藤 秀雄

能 観世鉄之丞 高安 滋郎

井上松次郎 井上礼之助

野村又三郎 河村 丘造

十二月七日 邦語会 雛子会

十二月十三日 歳末義捐金募集能

一部 二時始

花月 衣斐 正宜 西村 欽也

安達原 梅田 邦久 高安 滋郎

野村又三郎 井上礼之助

井上松次郎 井上礼之助

二部 五時半始

能 木 河村 鉦二 高安 滋郎

井上松次郎 佐藤 友彦

能 狸々 長田 曉 西村 欽也

能 瓦 佐藤卯三郎 佐藤 秀雄

十二月十四日 宝生会

能 千手 野口 緑久 西村 弘敬

能 黒塚 倉本 雅 西村 欽也

能 ぬげがら 井上松次郎 佐藤 秀雄

十二月十九日 高校生鑑賞能

能 紅葉狩 金春 欣三 高安 滋郎

井上松次郎 佐藤 秀雄

十二月廿一日 学生自演会

能 清 水 井上礼之助 佐藤卯三郎

能 経政 山田 信子 高安 滋郎

能 小督 福島さち子 境田 里美

能 前川 幸子 森 健次郎

能 佐渡狐 大竹 裕一 渡辺 一

一月十五日 清韻会

能 養老 殿島 修二 西村 欽也

能 頼政 赤間 鎮雄 高安 滋郎

能 榎ノ酒 井上松次郎 井上礼之助

能 揚貴妃 宝生 九郎 佐藤卯三郎

能 春日龍神 内藤 泰二

一月廿五日

能 清 經 泉 嘉夫

能 舟弁慶 和島富太郎

能 三人片輪 野村又三郎 井上松次郎

佐藤卯三郎 井上礼之助

井上松次郎

何と云っても
ますはん
お茶は升半

創業天保十三年
升半茶店
名古屋・信馬町

◆大名古屋ビル地下街店◆栄(さかえ)地下街店◆サカエチカ店◆松坂屋<名店街>売店